ハ空虛ヲ容レサルハ法律ノ原則ナルニ依リ、新法ノ及ハサル所ハ悉ク舊法ノ充タス所トナルヘキヿ恰モ洲法(ランドレヒト)ノ盡サヽル場合ハ「ヨアキミカ」ニ返リテ事ヲ決シ或ハ新典ノ至ラサル場合ニ於テ舊格及土代ノ國令ニ依リ事ヲ定ムルカ如シ、故ニ國家會計ニ係ル法律ノ欠乏ニテモ憲法以前ニ返リテ專制政府ノ全權ヲ以テ之ヲ補フヲ可トス。

予ハ今此等ノ理論ヲ推考セサルヘキモ之ヲ要スルニ予ニ於テハ國家ハ現ニ存在スト云フヨリ起ルノ必要ヲ知ルノミニシテ即チ足レリ、而シテ國家ハ若シ人國庫ヲ閉スニ至レハ果シテ如何ニナリ行クヘキヤト云フカ如キ悲哀ナル想像ハ其ノ敢テ關繫スル所ニ非ス。事ノ標準ハ必要ノ一ニ在リ、只タ其ノ必須ノ度ヲ測ルニ於テ過ナカルヘキノミ、思フニ政府ヲシテ國債ノ利子官吏ノ俸給ニ至ルマテモ支拂ヲ中止セシムルハ諸君トイヘモ敢テ吾人ニ望マサル所ナルヘキ乎。

現ニ起レルカ如キ事情ハ憲法ニ戻レリトハ予ノ前後ニ於テ斷然拒否スル所ナリ。此ノ如キ見解ハ憲法ニ誓ヒタル幾多ノ官吏中之ヲ取ルモノ一人モ無キ義ナリト信セサルヲ得ス、何トナレハ官吏其ノ政府ニ服從スルコトヲ拒絶シ一月一日以後ハ俸給ヲ受ケサル可シト宣言シタル者ハ未タ一人モ有ラサレハナリ。予ハ敢テ官吏ヲ是非セントスルニ非ス、只タ此ノ事實ニ依

リ左ノ如キ結論ヲ爲サントスルノミ、曰政府ハ憲法ノ許サヽル所ヲ爲シタリトノ確信ハ未タ必スシモ不拔ナルモノニ非ス、若シ是レ確論ナランニハ數千ノ官吏中ニ良心ノ發作ニ依テ此ノ如キ政府ノ事務ニ與カルコトヲ拒絶スル者ヲ生スヘキ理ナリト。加之吾人現在ノ事情ハ之ヲ十四年以來年々豫算ノ議定ニ至ル前、始四ヶ月乃至六ヶ月ノ間ハ豫算ナクシテ政務ヲ行ヒ來ルノ例ニ比シテ一層憲法ニ戻レリト爲ス所以ノモノヲ見サルナリ。諸君ハ曰諸君ニ於テ豫算ノ或ル部分ヲ斷然否決シタルカ爲ニ現在ノ地位ハ一層困難ヲ加ヘタリト、然レトモ余ハ諸君ノ許可ヲ得テ一言セントス、諸君ノ決議ハ只タ諸君ノ決議タルノミニテハ更ニ法律上ノ効力ヲ有セス、諸君ハ諸君ノミニ於テ爲シタル決議ニ依リ或ル支出ヲ命令スルヿヲ得ス、又豫算法律ノ存セサル場合ニ於テ何レノ點マテハ國家ノ急務ヲ滿足セシムルヿヲ得ヘキヤニ付キ法律上ノ制限ヲ付スルヿヲ得ス。諸君ノ決議ヲシテ一ノ法律上ノ規定タルニ至ラシメンニハ必ス常ニ貴族院ノ同意ト國王ノ裁可トノ之ニ加ハランヿヲ要スヘシ。此ノ二者ノ未タ加ラサルニ於テハ法律ハ未タ存立セス、而シテ政府ハ只タ諸君ノ決議アルノミニテハ何ヲ爲スノ權利ヲ得ス、又義務ヲ得サルナリ。予ハ諸君ト此ニ非難辯論ヲ闘スコトヲ爲サヽルヘシ、然リトイヘモ諸君ハ予ノ言論ニ依リ既ニ政府ハ憲法ニ違背セストスル予輩ノ確信ノ堅牢ナル所以

ヲ知ルヘク、隨テ諸君カ憲法ノ許ス所ノ制限ヲ越エテ諸君ノ權力ヲ擴張セントスルニ當テハ政府ハ苟モ陛下ノ信任ヲ辱フスル限リハ斷乎トシテ之ニ反對セントスル決心ノ堅牢ナルヲ知ルヘシ。

苟モ憲法ノ諸君ニ許ス所ノ權利ハ諸君毫末モ減縮スル所ナクシテ之ヲ受クヘシ、諸君ノ之ヲ越エテ要求スル所ハ吾人之ヲ拒否シ諸君ノ要求ニ反シテ王室ノ權利ヲ認メテ息マサルヘシ、蓋シ斯ク討議スル所ノ上奏案ヲ陛下ニ奉提セントスルノ今日ハ恰モ他日儲君タルヘキ王子ノ誕辰ニ際スルヿ偶然ト謂ツ可シ。此ノ時ニ遭遇スルニ於テ吾人ハ二重ノ事業ノ吾人ノ道ニ横ハルヲ知レリ、曰王家ノ權利ヲ固守シ陛下後嗣ノ權利ヲ確保スル是レナリ、普魯西王國カ未タ其ノ天ニ受ケタル命定盡クスニ至ラサル今日ハ諸君ノ主張スル憲法上ノ結構ノ如キ純然タル虛色ヲ營ムノ時ニ非ス、今ニ於テ要スル所ハ靈祁自在ノ運動ナリ、議院政治ノ機械的運動ヲ容ルノ時ハ未タ至ラサルナリ」ト。

抑〻普魯西ニ於テ上述ノ如キ爭議ノ起リタル所以ノモノハ豫算ヲ議定セス、又ハ其ノ不成立ノ場合ニ於テ國家ノ財政ハ常ニ如何スヘキヤト云フニ就キ規程ヲ存セサルカ故ナリ。今又他ノ諸國ノ制ハ如何ト云フニ、佛蘭西、墺太利、亞米利加

ハ普魯西ト同樣ナリ。索遜ニ於テ憲法ニ此ノ事ニ關スル第百三十一條アリシモ同シク爭議ニ至リタルニ因リ千八百五十一年五月三日ノ法律ヲ以テ改正シタリ、其ノ大意ニ曰、國會ヨリ豫算ニ意見ヲ添ヘテ政府ニ提出スルトキハ政府ハ此ノ意見ニ依リ更ニ鄭重ノ審議ヲ爲シ、若シ其ノ意見ヲ以テ容納シ難キモノトスルトキハ之ヲ却下シ國會ヲシテ再議セシムヘシ。國會若シ固ク執リテ豫算ノ承諾ヲ拒ムカ又ハ既ニ解散ヲ命セラレタルトキハ國王ハ勅令ヲ發シテ豫算年度ノ終期ニ於テ現年度ノ爲ニ前年度ニ定メタル租稅ヲ徵集スルコトヲ命スヘシ。國會ニ於テ豫算年度ノ爲ニ前年度ニ定メタル租稅ヲ徵集スルコトヲ命スヘシ。國會ニ於テ豫算年度ノ終期マテニ豫算議決セサルトキハ上ニ同シク一年間前年度ノ會計法ニ依ルヘシ。但シ此ノ命令ヲ發スルハ國會ニ於テ豫算年度ノ終期ノ前十四日マテニ徵收ヲ許可スルノ假法ヲ議決セサルカ又ハ事情止ムヲ得サルニ因リ國會ヲ召集シ得サリシ時ニ限ル。

又瑞典憲法第百九條第三項ニ曰、

「若シ國會ノ閉會ニ至ル前ニ歲出豫算ヲ議決セス、又ハ徵稅ヲ以テ供給スヘキ歲入豫算ヲ確定セサリシトキハ次ノ國會開會ニ至ルマテ前年ノ歲計豫算ノ適用ヲ繼續スヘシ。若シ歲入ノ全

額ヲ議決シタルモ其ノ配分ニ付両院ノ一致整ハサルトキハ議決ヲ經タル歳入出額ト前年度ノ議決ニ依リ既ニ配分ヲ決行シタル歳入ノ全額トノ間ニ成立セル比例ヲ以テ各款項ニ記載シタル歳入ヲ増減スヘシ。此ノ場合ニ於テ國會ハ銀行及公債委員ニ委任シ既定ノ基礎ニ從ヒ商議シ及新ニ命令ヲ發セシムヘシ」

バーテン憲法第六十二條ニ曰、

「有期租税ハ左ノ場合ニ於テ滿期ノ後六ケ月間仍ホ徴收スルコトヲ得

一、歳出入豫算ヲ議了セサル前ニ議會解散ヲ命セラレタルトキ

二、兩院ノ議事久シキニ彌リテ結局ニ至ラサルトキ」

西班牙ノ追加憲法第七條ニ曰、

「若シ歳計豫算法ニ付兩院ノ協議整ハサルトキハ前年度ノ豫算法ヲ適用スヘシ」

然レハ則チ議會議決ノ如何ニ依リ國家ヲシテ無豫算ニ陷ラシムルコトヲ防止スル所以ノ規程ハ各國ノ或ハ其必要ヲ感シ或ハ既ニ設ケタル所ナリ。

前年度ノ豫算ニ依ルト云フニ關スル一ノ問題ハ若シ二年以上豫算成立セサルノ場合繼續セハ如何ト云フニ在リ。其ノ第二年ニ於テハ前年度ノ豫算ト指ス

可キ者存セス、故ニ或ハ疑ヲ生スヘシ、然リト雖其ノ實ハ前々年度ノ分ニ依ルヘキヿ明白ナリトシテ、尚ホ疑ノ遺レルモノハ他無シ、前年度ニ於テ豫算外ニ起リテ國會ノ承諾ヲ經タル歳出ハ其ノ翌年ニ至リ更ニ之ヲ支出スルコトヲ要スルヤ否ト云フ是レナリ。此ノ問題ハ當初未定ナリシカ現在ノ政府ハ第二議會ニ於テ追加豫算ナルモノヲ提出スルノ例ヲ開キタリ、是レ豫算ニ對スル追加ナレハ翌年度ニ對シテハ前年度支出中ニ入ルヘキナリ。

又一ノ問題ハ前年度ヨリ本年度ニ渉レル繼續費アリテ兩年ニ於テ其ノ支出額ヲ異ニスル場合ニ關ス。例ヘハ前年度ハ十萬圓ナリシモ本年度ハ十二萬圓ナリトセンニ、前年度ノ豫算ニ依ルトキハ本年度ニ於テモ十萬圓ヲ支出スルノ外ナシ、然レモ是レ最初ノ計畫ニ違フコトナレハ不便不利ナルモノアリ、加之繼續費ハ當初ニ於テ既ニ全体ニ渉リ協贊ヲ經タルモノナレハ、假令大体ハ全年度ノ豫算ニ依ルヘキ場合ト雖、其ノ例外ト爲スヘシト云フコト一般ノ論ナリ。

第七十二條　國家ノ歳出歳入ノ決算ハ會計檢査院之ヲ檢査確定シ政府ハ其ノ檢査報告ト俱ニ帝國議會ニ提出スヘシ。

會計檢査院ノ組織及職權ハ法律ヲ以テ之ヲ定ム

決算ハ豫算ト相竢テ帝國議會カ政府ノ財政ヲ監督スル所以ノ者ヲ爲セリ。財政ノ性質トシテ法律ヲ以テ確定スル能ハサルカ故ニ半ハ命令ノ性質ヲ以テ豫算ヲ作リ、必要ニ應シ政府ノ獨立權ヲ以テ變更シ得可キモノトセリ、從テ變更ハ敢テ咎メサルモ其ノ果シテ十分ノ必要アルニ出テタルヤ、及其ノ變更ニ屬セサル部分ノ如キモ十分法律ヲ遵由シタルヤ否ヤヲ糺サヽルヘカラス。是レ決算ヲ報告セシムル所以ニシテ其ノ目的ニ二アリ、即チ(一)算數上ノ正否ヲ明ニスル事、及(二)處分上ノ當否ヲ明ニスル事是レナリ、前者ハ行政上ノ責任ニシテ後者ハ憲法上ノ責任ナリ。算數上ノ正否ハ加減乘除ノ正否及其ノ現今ニ合スルト否トヲ云ヒ、處分上ノ當否ハ豫算ヲ以テ定メタル歳出歳入ノ款項ニ違ハサルヤ、此ノ款項ノ爲ニ定メタル金圓ヲ以テ之ヲ仕拂ヒタルヤ、及豫算外ノ支出ヲ爲セシヤ否ヤヲ糺スヲ曰フ。故ニ會計檢査院ハ此ノ二點ニ就キ政府ノ決算ヲ檢査シ算當上ノ正否ハ其ノ院ノ職權ヲ以テ會計法及會計規則ニ依リ之ヲ處分シテ其ノ始末ヲ帝國議會ニ報告シ、處分上ノ正否ハ之ヲ帝國議會ニ報告シ當該ノ行政

官廳ヲシテ議會ニ對シ其責ニ任セシムヘキナリ。

會計檢査院ノ性質ハ上文ニ依リ略明瞭ナルヘシ。此ニ一言スヘキハ其ノ憲法實施以前ト以後トニ於テ必ス組織職權ヲ異ニセサルヲ得サルヿ是レナリ。憲法以前ニ於テハ一切ノ法律ハ假令法律ノ名ヲ有スルモ天皇ノ全權ヲ以テ之ヲ發シ、必要ヲ見レハ全權ヲ以テ自由ニ變更スル所ナルカ故ニ實ハ補充命令ニ外ナラス、豫算ノ如キモ只タ算當上ヲ正シウスルノ責任アルノミ、必スシモ規程ヲ變更セサルノ責アラサリキ。故ニ從來ノ會計檢査院ハ政府ノ一部トシテ行政ニ附屬シ、專ラ算當上ノ檢査ヲ爲シ、處分上ノ檢査ノ如キハ大藏省ノ出納上ニ於テ不便ヲ避ンカ爲ニ主計局ニ於テ之ヲ爲スコト多カリキ、從テ豫算ヲ超過シ或ハ豫算外ノ支拂ヲ必要トスルニ於テモ、先ツ主計局ニ之ヲ計リ、其ノ許容セサルニ於テハ政府ニ之ヲ計リ、其ノ認許ヲ得ハ行政權ノ範圍ニ於テ隨意ニ動カスヿヲ得タリ、又會計檢査院ニシテ或ル一省ノ決算ノ豫算ノ款項ニ違背セルヲ發見スルモ只タ之ヲ內閣ニ報告スルマテナリキ。然ルニ憲法一タヒ制定セラレ、帝國議會ニ於テ協贊承諾ノ權ヲ取ルニ至ルトキハ會計檢査院カ政府ノ爲ニ決算ヲ

檢査スルノ地位ハ一轉シテ帝國議會ノ爲ニ此ノ職ヲ行フノ地位ニ入レリ、且ツ大藏省ノ經費ノ如キモ之ヲ檢査セサルヲ得サルカ故ニ、政府トハ獨立シタル機關トナラサルヲ得ス、即チ普魯西ニ於テ其ノ會計檢査院ニ關シ一千八百六十六年及七十二年ノ兩度ニ行ヒタル改革ノ如キモ此ノ方向ニ出ツルモノナリ。既ニ政府ヨリ獨立ストイヘトモ亦政府ノ爲ニ各省廳ノ會計ヲ檢査スルノ任ハ未タ解ケサルニ非ス、從テ全ク帝國議會ノミノ機關ト成ル可キニモ非ス、要スルニ政府帝國議會ノ兩者ノ爲ニ存シテ其ノ局外ニ中立スヘキモノナリ。立法行政ノ局外ニ中立スル者ヲ元首トスルカ故ニ明治二十二年五月法律第十五號ヲ以テ新ニ會計檢査院ノ組織ヲ定ムルニ當リテハ之ヲ以テ天皇ニ直隷シテ政府ヨリ獨立セルモノトナシ、其ノ組織ハ恰モ一個ノ裁判所ノ如キ合議体ヲ成シ、其ノ吏員ノ如キモ裁判官ト一般終身官タラシムルニ至リタリ。

今同法中會計檢査院ノ國法上ノ性質ヲ規定セル條項ヲ抽出セハ左ノ如シ。

第一條　會計檢査院ハ天皇ニ直隷シ國務大臣ニ對シ特立ノ地位ヲ有ス

第二條　會計檢査院ハ官金ノ收支官有物及國債ニ關ル計算ヲ檢査確定シテ會計ヲ監督ス

第六條　會計檢査官ハ勅令ニ定メタル資格ヲ具フル者ヲ以テ之ニ任ス

會計檢査官ハ刑事裁判若ハ懲戒裁判ニ依ルニアラサレハ其意ニ反シテ退官轉官又ハ非職ヲ命セラルヽコトナシ會計檢査官ニ關ル懲戒ノ條規ハ別ニ定ムル所ニ依ル

第八條　會計檢査官ハ他ノ官職ヲ兼ネ及帝國議會又ハ地方議會ノ議員トナルコトヲ得ス

第九條　會計檢査院ノ議事ハ總會議又ハ部會議ヲ以テ決ス、總會議ハ院長ヲ以テ議長トシ部會議ハ部長ヲ以テ議長トス、議事ハ多數ヲ以テ決ス、可否同數ナルトキハ議長ノ決スル所ニ依ル

第十一條　計算檢査ノ判決ハ凡テ會議ニ於テス、其ノ總會議ニ於テスルト部會議ニ於テスルトハ會計檢査院長ノ定ムル所ニ依ル

第十三條　會計檢査院ノ檢査ヲ要スルモノ左ノ如シ、(一)總決算、(二)各官廳及官立諸營造ノ收支及官有物ニ關ル決算、(三)政府ヨリ補助金又ハ特約保證ニ與フル團体及公立私立諸營造ノ收支ニ關ル決算、(四)法律勅令ニ依リ特ニ會計檢査院ノ檢査ニ屬セラレタル決算

第十四條　會計檢査院ハ憲法第七十二條ニ依リ決算ヲ檢査確定スルト同時ニ左ノ諸項ニ付報告書ヲ作ルヘシ、(一)總決算及各省決算報告書ノ金額ト各出納官吏ノ提出シタル計算書ノ金額ト符合スルヤ否ヤ、(二)歳入ノ賦課徴收歳出ノ使用官有物ノ得有活賣讓與及利用ハ各〻其ノ豫算ノ規程又ハ法律勅令ニ違フヿナキヤ否ヤ、(三)豫算超過又ハ豫算外ノ支出ニシテ議會ノ承諾ヲ受ケサルモノナキヤ否ヤ

第十五條　會計檢査院ハ各年度ノ會計檢査ノ成績ヲ上奏シ其ノ成績ニ就テ法律又ハ行政上ノ改正ヲ必要トスヘキ事項アリト認ムルトキハ併セテ意見ヲ上奏スル

第六章　會計

コトヲ得

第十七條　金庫ノ出納及簿記上ニ關ル各省ノ命令ニ付會計檢査院ハ其ノ發布ノ前通知ヲ受ケ意見アルトキハ之ヲ陳述スルコトヲ得、會計檢査院ハ收入支出ニ關ル規則ヲ定メ及既定ノ規則ヲ改正スル各省ノ命令ニ付其ノ發布ノ前通知ヲ受ク

第十九條　會計檢査院ハ各官廳ヲシテ檢査上必要ナル簿書及報告ヲ提出セシメ及主任官吏ノ辯明書ヲ求ムルコトヲ得、會計檢査院長ハ檢査上必要ト認ムルトキハ主任官吏ヲ派遣シ實地檢査ヲ爲スコトヲ得、此場合ニ於テハ豫メ本屬長官ニ通知シ該長官ハ主任官吏ヲシテ檢査ニ立會ヲ爲サシムルコトヲ得

第二十條　會計檢査院ハ出納官吏ノ計算書及證憑書類ヲ檢査シ正當ナリト判決シタルトキハ該官ニ對シ認可狀ヲ付シ其ノ責任ヲ解除ス、若必要ナル場合ニ於テハ之ヲ推問シ辯明又ハ正誤ヲ爲サシメ仍正當ナラスト判決シタルトキハ本屬長官ニ移牒シテ分處セシム

第廿一條　會計檢査院ノ判決ニ據リ辨償ノ責ヲ負フ者ハ天皇ノ恩赦ニ由ルノ外本屬長官之ヲ減免スルコトヲ得ス

第廿二條　出納官吏計算證及證憑書ノ提出ヲ怠リ又樣式ヲ守ラサルトキハ會計檢査院ハ本屬長官ニ移牒シテ懲戒處分ヲ要求スルコトヲ得

第廿三條　政府ノ機密費ニ關ル計算ハ會計檢査院ニ於テ檢査ヲ行フ限ニ在ラス

○政府ハ其ノ檢査確定ト俱ニ之ヲ帝國議會ニ提出スヘシ。檢査確定ノ報告書ヲ議會ニ提出スルハ議會ヲシテ其ノ豫算協賛ノ權ノ結果ヲ收メシムル所以ナリ。然レ𪜈其ノ提出スル所ニ就キ議會ハ何等ノ處置ヲ爲スヘキヤニ至リテハ

憲法ハ一言セス、且各國ニ於テモ是レ一ノ問題ト爲レリ。但シ提出ノ目的ノ議會ヲシテ歳出歳入ノ果シテ豫算ニ違越セサルヤ及算當ニ差錯ナキヤヲ精査セシムルニ在ルハ疑ヒ無シ、而シテ豫算ニ違越セス且違算ナキトキハ其ノ儘々ニシテ止ムヘシト雖、若シ違越違算アルヲ認ムルトキハ則チ如何ト云フコト是レ一ノ問題ナリ。

一方ノ論ニ依ルトキハ憲法既ニ會計檢査院ヲ以テ會計ニ關スル終審ノ處ト爲スカ故ニ會計檢査院ノ豫算違越ニ非ス、又違算ナシトシテ報告シタルコトハ國會ニ於テ其ノ決算ヲ以テ之ヲ違越ナリト違算ナリト爲スコトヲ得ス。又議會ハ檢査院ニ對シテ質問ヲ爲スコトヲ得ス、唯タ政府ニ對シ質問スルノ權ヲ憲法ニ依リ有スルノミナリ。此ノ論ハザイテル（ヒ巴威里國法論第四卷第四百三十二頁）ノ取ル所ナリ、即チ曰

「政府ハ實ニ決算報告書ヲ議會ニ提出センコトヲ要ス、然レ𪜈決算ヲ提出スルヲ用サス。政府ハ議會ノ決議ニ因リ始メテ洗除ヲ被ルニ非ス、約言セハ議會ハ高等決算再審所ナルニ非ス、自ラ會計檢査院ナルニ非ス、決算報告書ヲ議會ニ提出スルハ財務行政ノ爲ニ決算ヲ監督スル

ニ在ルニ非ス、唯タ議會ノ爲ニ其ノ豫算協賛權ニ關シ國法上ニ於テ立ツ所ノ地位ヲ確保スルニ在リ」。中略

「議會ニシテ決算報告書ヲ審査スルノ權アル上ハ議決法ヲ以テ其ノ審査ノ結果ヲ確定スヘキコト勿論ナリ、然レ𪜈前述ノ如ク此ノ確定ハ決算査定ノ性質ニ出ツヘキニ非ス、唯タ議會ノ本來有スル所ノ職權ノ範圍内ニ止マルヘキモノトス、即チ左ノ如シ」。

「議會ハ適宜ノ体裁ニ於テ決算報告ヲ滿足トスルヤ否ノ意ヲ表白スヘシ。即チ決算認承ノ旨ヲ宣告スルカ又ハ左右ニ托シテ此ノ宣告ヲ爲スコトヲ拒絶スヘキモノナリ」。

「此ノ決算承認ハ實ニ解責ノ意味アルニ非ス、然リト雖亦全ク無旨趣ナルニ非ス。即チ是レ議會ハ其ノ外形上ノ權利ヲ行用シテ以テ政府ノ責任ヲ要求スヘキノ理由ヲ發見セス、少ナクトモ此ノ要求ヲ爲スノ意ナキヿヲ表白スルモノナリ」。

「決算ノ認承拒絶ハ自ラ一定ノ効力ヲ有セス、唯タ或ル點ニ於テ正經ナラサルモノアリトスル議會ノ意見ヲ確定スルニ止マレリ。此ノ確定ニ因リ實際ノ結果ヲ生スルト否トハ議會ニ於テ之ニ依リ或ル他ノ外形上ノ權利例ヘハ大臣告訴權ノ如キヲ云フニ行使センコトヲ決スルト否トニ因レリ、然レ𪜈此等ノ權利ニシテ議會全体ニ屬スルトキハ、其ノ一院ニ於テ認承ヲ宣告シタルモノニ對シ

テハ即チ之ヲ行使シ難シ」ト。

然レ𪜈議會ノ決算審査權ヲ以テ斯ク効力薄弱ナルモノト爲スコトニ就キテハ異論ナキニ非ス、就中各國ノ國會ニ於テ反對ノ議論屢〻起レルコトハラバンド氏豫算論ニ普魯西ノ事實ヲ述フル處ニ於テ見ルヘシ、原書第七十頁法制局翻譯第二百二十二頁曰

「國會ヲシテ政務上ノ問題ヲ解カシムルカ爲會計檢査院ノ國會ヲ助クルハ唯憲法第百條ニ規定セル左ノ一件アルノミ

各年ノ國用總計算及國債ノ一覽ハ會計檢査院ノ記入ヲ以テ政府ノ責任ヲ解除シタル上之ヲ議院ニ提出スルモノトス

然レ𪜈此ノ條文ハ未タ完全ノモノト謂フコトヲ得ス普國憲法ニハ往々晦澁不鬯ノ條文多ク爲ニ世人ノ爭論ヲ招クコト稀ナラス、此ノ條文モ亦曖昧模糊トシテ明了ヲ缺クモノト謂フヘキナリ、抑〻右條文ニ所謂會計檢査院ノ記入トアルハ一切ノ記入ヲ指スモノナルカ又ハ國會ニ提出スル記入ニハ或ル一定ノ種類アリテ必ス此ノ種類ノ記入ヲ要スルノ意ナルカ、將タ又會計檢査院ハ計算ノ如何ナル個條ニ附キ記入スヘキモノナルヤ、該條文ハ此等重要ナル諸點ヲ一モ明示スル所アラサルナリ、憲法ノ不明既ニ斯ノ如シ、宜ナル哉之カ爲ニ國會議場ノ葛藤ヲ釀

成シテ年來落著ヲ看ル能ハサルナリ」。

「會計檢査院ノ記入ヲナスコトニ就キ同檢査院ノ事業ハ之ヲ三種ニ分ツヘシ、第一各自計算書勘定ノ正否ヲ檢閲シ、第二支出ノ歳計ニ違背セル廉ナキヤヲ檢閲シ、第三計算檢閲ノ際行政管理方ノ宜シカラサルコトヲ發見スルトキハ之ヲ摘發スヘキニ在リ」。

「計算書ヲ國會ニ提出スルニハ從來唯タ第一種ノ記入ヲ爲セシニ止マレリ、即チ會計檢査院ニ於テ逐目ノ計算ヲ黙檢シ若シ各科目ノ計算ヲ始メ之ニ附屬セル受取書證文類及算出ノ惣金額等全ク整頓シテ毫モ脫漏異算ナキカ又ハ縱令脫漏異算アリタルモ會計檢査院ノ通告ニ因リテ既ニ改正セラレタルキハ、會計檢査院ヨリ計算書ニ相違ナキ旨ノ記入ヲナシ以テ國會ニ提出スルナリ。國會ニ提出スヘキ計算書ニハ會計檢査院唯此ノ保證ヲ附シテ其ノ記入ヲナスニ止マリ、更ニ他ノ記入ヲナスコトナシ即チ千八百五十年ノ國會ニ於テ政府ノ計算ヲ是認シテ其ノ責任ヲ解カシメタルニ於テモ國會ノ依據トナセシハ實ニ此ノ記入アルノミナリキ、然レモ此ノ如キ方法ヲ以テ政府ノ責任ヲ解除セシムルハ眞ニ有名無實ノコトタルハ亦國會ニ於テ屢〻唱論セラル、所ナリ、殊ニ代議士キューネ氏カ國會ノ演說ニ於テ從來ノ如キ政府責任ノ解除方法ハ眞面目ノ仕方トモ思ハレス、譬ヘハ假面ヲ被リテ戲踏スルト何ノ異ル所カアラント

ノ一言ハ最モ喝采ヲ博シテ衆人ノ贊成ヲ得タリ、最モ味フヘキ言語ト謂フヘシ、抑〻收支總計算ナル者ハ畢竟各科目計算ノ結果ヲ集合セル者ニ過キスシテ其ノ計算ノ正確ナルコトヲ調査スルモ唯タ計算書表面ニ記載セル金額ヲ更ニ牙籌ヲ執リテ算用スルニ在ルノミ、故ニ會計檢査院ニ於テ各科目計算ノ正確ナル旨ヲ保證シ又總計算ノ勘定ニ相違ナキヿヲ證明シテ之カ證書ヲ作リタリトテ國會ハ之カ爲ニ格別ノ利益ヲ享クルモノニ非ス、何トナレハ時宜ニ據ラハ總計算書ヲ覆案再算シテ會計檢査院ハ正確ニ合算セシヤ否ヲ確メサルヘカラサレハナリ、是ニ因テ之ヲ觀レハ會計檢査院ヨリ計算書ノ外形上ノ正當ヲ證明セル記入ヲ得タルノミ、收支ノ實額ノ果シテ正當ナルヤ法律ニ戻ラサルヤ成規ノ手續ヲ履行セルモノナルヤニ付キテハ未タ曾テ會計檢査院ノ助力ヲ以テ審査シ得ヘキ所ニ非サルナリ、國會ヲシテ之カ審査ヲ爲シ得ヘカラシメント欲セハ國會ノ自ラ組織セル國會會計檢査院ナルモノヲ設ケ之ヲシテ會計檢査院ノ調製セル一切ノ書類ヲ自由ニ展閲シテ會計檢査院ノ調査セシ計算ヲ再ヒ調査セシムルニ在ルノミ」。

「此ノ如ク會計檢査院ハ唯外形上ノ檢査ヲ爲スニ止マルヲ以テ近來國會ノ兩院ハ益〻會計檢査院ニ於テ實体上調査ノ記入ヲ爲サンコトヲ請求シ、而シテ實体上ノ調査ノ方法タルヤ之ヲ分

テ別項調査及總括調査ト爲シ、別項調査ニ於テ各目ノ計算ヲ調査シテ是認スヘキモノハ是認ノ記入ヲ爲シ、認可スヘカラサルモノハ不認可ノ附箋ヲ爲シ、又總括調査ニ於テ會計ノ現狀及行政上ノ缺典ヲ一般ニ擧止セシムヘキナリ。蓋行政上ノ缺典ヲ指摘センコトヲ望メル國會ノ請求ハ政策上ノ得失ヨリ論スルトキハ實ニ正當ノ請求ニシテ其ノ利益ハ必ス多カルヘシ、然レ𪜈政府ノ責任ヲ解除セシムルニ付キ必ス行政上ノ當否ヲ檢査スヘシト爲スハ國法上斷然不當ノ請求ト謂ハサルヲ得ス、行政上ノ惡弊ヲ指摘シテ改良ノ方法ヲ將來ニ計畫シセムルハ政策上甚タ得策ナリ、然レ𪜈國會ハ之ニ因リテ成規ニ從ヒ且法律ニ基ケル既往ノ支出ニ溯リ大臣ヲ詰問シテ其ノ責任ヲ負ハシメ、又ハ其ノ責任ヲ增サシメ得ルモノトナスハ決シテ正當ノ論ニアラサルヘシ、且夫會計檢査院ノ職務上ヨリ論スルモ議院ヲシテ政府ノ責任ヲ解カシムルノ目的ヲ以テ毎年行政ノ缺典ヲ指摘シテ之ヲ議場ニ報告スルハ法律上其ノ義務ト云ヘカラス、加之會計檢査院ノ明言セシ不認可ノ廉ヲ公然世ニ露呈セシムルハ政治上ノ妨害トナルコト鮮キニアラサルナリ」ト。中略

○帝國憲法第六章附連ノ憲法問題

上文ニ於テハ帝國憲法第六章ニ於ケル逐條ノ意議ヲ了シタリ、而シテ第一回ヨ

リ第三回ニ至ル帝國議會ニ於テ豫算ヲ討議スルノ間ニ實際ニ就キ紛々問題ヲ生シ、其ノ間既ニ逐條ノ講義ニ述ヘタル所ニ當ルモノモアレト、又中ニハ未タ論及ノ便宜ヲ得サル所モ有レハ左ニ簡略ニ遺漏ヲ補修セントス。

第一ノ問題ハ帝國議會ハ豫算上ヨリ官制改革ニ容喙スルコトヲ得ルヤ否ト云フ是レナリ。答テ曰、是レ憲法違反ニ非ス、何トナレハ議會ノ議決ハ假令如何ナル体裁ニ於テ之ヲ爲スモ唯タ意見タルニ止マリ、實行ノ効力ヲ有セス、而シテ憲法違反ハ實行ノ上ニ顯ハルヽノ關係ナレハナリ。議會ヲシテ協賛ノ効ヲ奏行セシメンカ爲ニハ假令現行ノ法度ニ如何ホト反對スルコトニテモ之ヲ討論シ議決スルノ權アラシメンコトヲ要ス、若之ヲシテ常ニ現行法令ノ範圍内ニ於テノミ議論スヘキモノナラシメハ議會ハ曾テ憲法法律ノ改正ヲ議決スルノ機會ヲ得サルヘキナリ。憲法ニ於テハ議會カ憲法違反ノ議決ヲナシタル場合ノ處分法ヲ揭ケス、解散ヲ命スルノ一事アレトモ是レ政治上ノ手段ニシテ法律上一定ノ條件ヲ設ク可キコトニ非サルナリ。ハウケ大臣責任論第七十七頁ニ曰、責任ハ國家ノ行政ニ與カルノ結果ナリ、然ルニ立憲國家ノ議會ハ行政ニ與カルノ

權ヲ缺クカ故ニ、隨テ責任ノ問題モ亦起ルコトナシ」ト。曾テ普魯西ノ國會カ同國上等裁判所ノ判決ヲ不當ナリトスルノ議決ヲ爲シタルコトヲ述ヘタリ、其ノ他正當職權ノ外ニ於テ議決ヲ爲セル場合ハ枚擧ニ遑アラス。唯タ此等ノ場合ニ於テハ國家ノ他ノ機關ニ於テ之ヲ有効ノ議決ト見ルノ義務ヲ脫スルノミナリトス。

第二ノ問題ハ豫算ニ憲法違反ト云フコトアリヤ、若之レアリトセハ其種類及結果ハ如何ト云フコト是レナリ。

憲法ハ豫算ニ付キ幾多ノ條項ヲ揭ケタリ、故ニ此等ニ違反スルモノハ憲法違反ノ豫算タルコト明白ナリ、而シテ前ニ衆議院ニ提出シ（憲法第六十五條）而シテ議會兩院ノ協贊ヲ經ヘキ（第六十四條）ハ豫算成立ノ本然ノ二條件ニシテ其ノ一ヲ闕クモノハ始ヨリ豫算ノ名ヲ下シ難キコト明カナリ、然ルニ此等ノ條件ハ之ヲ具ヘ既ニ衆議院ヨリ貴族院ニ移リテ議定ニ至リ、貴族院議長ヨリ國務大臣ヲ經テ上奏シタル所ノモノニ就キテモ尙ホ正當ノ豫算タルニ缺ク可カラサル條件アリテ憲法第六十條以下ノ數條ニ明示シタリ、而シテ今此等ノ條件ヲ精査スルトキハ其ノ

中ニ二種ノ別アリ隨テ之ニ違反スルノ結果ニモ亦タ二種アルコトヲ知ルナリ。

第一種ハ則チ豫算ノ体裁ニ關スル條件ナリ、左ノ如シ。

一國家一年ノ歲出歲入ノ全部ヲ含蓄スルコト（第六十四條）

一豫備費ヲ設クルコト（第六十九條）

第二種ハ則チ豫算議定ニ關スル條件ナリ、左ノ如シ。

一憲法上ノ大權ニ基ケル既定ノ歲出及法律ノ結果ニ依リ又ハ法律上政府ノ義務ニ屬スル歲出ハ政府ノ合意ナクシテ帝國議會之ヲ廢除削減スルヲ得サルコト（第六十七條）

一繼續費トシテ帝國議會ノ協贊ヲ求ムルノ權政府ニ存スルコト（第六十八條）

此ノ二種條件ノ差違ハ豫算ニシテ前者ノ一ヲ缺クトキハ即チ全部無効ニ歸スヘク、後者ノ一ヲ闕クトキハ其ノ議事ノミ無効ニ屬ス、例ヘハ歲出又ハ歲入ノ一方ヲ揭ケテ他ノ一方ヲ揭ケス、又ハ歲出若ハ歲入ノ一部分ヲ揭ケテ他ノ一部分ヲ揭ケサルモノハ憲法第六十四條ニ違反シ形式ノ上ニ於テ正當ナル豫算ト見做スヘカラス、假令之ヲ豫算ト言フモ是レ帝國憲法ノ所謂豫算ニ非ス、又一會計年度ノ全体ニ涉ラス或ハ一會計年度以上ニ及フモノニ付テモ亦然リトス。

次ニ豫備費ハ帝國憲法ニ於ケル豫算ノ組織ノ必要ナル一部分ニシテ且其ノ額ノ如キモ避クヘカラサル豫算ノ不足ヲ補ヒ又ハ豫算外ニ生スヘキ必要ノ費目ニ充ツルニ足ルモノナラサルヘカラス、但タ憲法ハ其ノ員數ヲ示定セサルノミ即チ豫備費額ノ過不及ハ姑ク之ヲ政治上ノ問題トシテ度外ニ措クモ豫備費ヲ以テ歳出ノ一部分ニ置カサルモノハ到底憲法ノ認メテ以テ豫算ト爲ス所ニ非サルコト明ナリ、而シテ豫備費ノ款項ヲ設ケタルニ拘ハラス之ヲ空白ニシテ金員ヲ記入セサルカ如キハ尚ホ豫備費ヲ設ケサルニ坐スルモノトス。

以上ハ即チ豫算ノ豫算タル所以ノ体裁ニ欠クヘカラサル要素ナリ、其ノ一ヲ欠クモノヲ以テ豫算ト見做スヘカラサルハ尚ホ華族又ハ勅任セラレタル議員ヲ欠クモノヲ以テ貴族院ト見做スヘカラサルカ如シ、然ルニ第二種ノ條件ニ至リテハ大ニ之ト異ナルモノアリ、第一ニ憲法第六十七條ノ大權ニ基ケル既定ノ歳出及法律ニ依リ又ハ法律上政府ノ義務ニ屬スル歳出ハ豫算中ニ之ヲ設ケサルモ爲ニ豫算ノ豫算タル所以ヲ害スルコトナシ、例ヘハ法律上政府ノ義務ニ屬スル歳出ノ如キハ全ク存セサル場合ヲ想像シ難キニ非ス、語ヲ換ヘテ言ヘハ國債

ノ利子及償還、會社營業ノ補助及補償、政府ノ民法上ノ義務又ハ諸般ノ賠償ノ額ハ必シモ國家ノ存立ニ欠クヘカラサルノ支出ニ非ス、故ニ豫算上全ク此ノ類ノ支出ヲ欠クノ場合モ或ハアラン、此ノ場合ニ於テ憲法第六十七條ノ所謂法律上政府ノ義務ニ屬スル歳出ナルモノハ存セスト雖、其ノ存セサルカ爲ニ此ノ豫算ヲ以テ豫算タル所以ニ欠ク所アルモノト爲スヘカラス、唯タ其ノ果シテ存スル場合ニ於テ議會ハ政府ノ同意ナシニ之ヲ廢除削減スルノ權ナキコトヲ規定シタルノミ、是レ第六十七條ノ歳出ハ豫備費ト大ニ其ノ法理ヲ異ニスル所以ナリ、此ノ區別タル豫算成立ノ上別テ最モ重大ナル關係アルモノナルカ故ニ十分注意ヲ加ヘサルヘカラサル所ナリ。

繼續費ニ至リテモ亦然リ、憲法第六十八條ハ「只タ特別ノ樞要ニ依リ政府ハ豫メ繼續費トシテ帝國議會ノ協賛ヲ求ムル」ノ權アルコトヲ示シタルノミ、豫算中必スシモ繼續費ナルモノアルヘキヲ言ハス、其ノ全ク存セサル場合ニ於テモ豫算ハ仍ホ完全ナリ、政府ニ於テ或ル歳出ニ付繼續費トシテ協賛ヲ求メタルトキ其性質ニ於テ繼續費タルヘキモノナルト否トヲ問ハス帝國議會ニ於テ政府ハ只

タ一年ニ向テ協賛ヲ求ムルノ權アルノミ、數年ニ渉リ之ヲ求ムルノ權ナシト議定シタル場合ニ於テ始メテ憲法第六十八條ニ違反スヘシ、其ノ政府ニ此ノ權アルヲ否マスト雖格段ナル繼續費ノ款項ヲ不可トシテ之ヲ廢除スルハ決シテ憲法違反ニ非サルナリ、即チ知ル第六十七條及第六十八條ノ規程ハ只タ議會ノ議定權ニ關スル規定ニシテ豫算ノ組織体裁ニ關スル規程ニ非サルコトヲ。

爰ニ稍〻緻密ナル分析ヲ要スルモノハ皇室經費ナリ、憲法第六十六條ニ曰「皇室經費ハ現在ノ定額ニ依リ毎年國庫ヨリ之ヲ支出シ將來增額ヲ要スル場合」ヲ除ク外帝國議會ノ協賛ヲ要セス」ト、即チ本條ハ豫算ノ体裁ニ關スル條件ナルカ將タ又其ノ議決ニ關スル條件ナルカト問フニ、右第六十六條ニ限リ兩種ノ條件ヲ合併スルモノト謂フヘシ、即チ「皇室經費ハ現在ノ定額ニ依リ毎年國庫ヨリ之ヲ支出シ」ト云ヘルハ皇室費ノ歳出豫算中缺クヘカラサルノ一部分タルコトヲ規定スルモノナリ、憲法ノ毎年國庫ヨリ支出スヘシト規定スルモノハ必ス豫算中ニ之ヲ掲ケサル可カラス、何トナレハ凡ソ國家ノ歳出ハ盡ク之ヲ豫算ニ載スヘキコト憲法第六十四條ノ規定スル所ナレハナリ、然リ而シテ「將來增額ヲ要スル場

合ヲ除ク外帝國議會ノ協賛ヲ要セス」ノ一段ハ歳出ノ此ノ部分ニ對スル議會ノ議定權ニ對スル條件ナルコト明ナリ、故ニ皇室經費ニ至リテハ豫算中必ス之ヲ設クヘキニ於テハ豫備費ニ類シ議會ニ廢除削減ノ權ナキニ於テハ第六十七條ノ歳出ニ類シ、而シテ政府ト雖其ノ廢除削減ニ同意スルノ權ナキニ於テ第六十七條ノ歳出ヨリモ更ニ一歩ヲ進メタルモノナリト謂フヘシ。

次ニ論スヘキハ憲法ノ條項ニ基ケル豫算ノ條件ニ前顯二種ノ區別アルヨリシテ其ノ成立ノ上ニ如何ナル結果ヲ及ホスヤト云フ是レナリ、之ヲ要スルニ豫算ノ体裁ニ於テ欠ク所アルモノハ假令衆議院ヨリ之ヲ貴族院ニ移シ貴族院ヨリ國務大臣ヲ經テ之ヲ議定奏上スルニ至ルモ之ヲ目シテ憲法ノ所謂豫算ナリト爲スヘキニ非ス、憲法ハ(一)國家一年ノ歳出歳入ノ全部ニ渉リ(二)豫備費ヲ設ケ及(三)現在ノ定額ニ依リ皇室經費ノ一款ヲ存スルモノヲ以テ豫算ト爲セリ、故ニ其ノ一ヲ欠クモノハ豫算ナリトスルヲ得サルコト猶ホ貴族院ヲ欠クモノハ帝國議會ニ非ス國務大臣ノ副署ヲ欠クモノハ法律ニ非サルカ如シ、故ニ此ノ場合ニ於テハ元首ニ於テ豫算トシテ之ヲ國家ニ公示スルコトヲ得ス、何トナレハ元首

ト雖憲法ノ條規ニ依ラサルモノニ對シ其ノ統治權ヲ行フコトヲ得サレハナリ。

然ルニ豫算ノ議定ニ關スル條件ニ於テ欠クル所アルモノハ右ト全ク其ノ法理ヲ異ニス、即チ此ノ場合ニ於テ無效ニ歸スルモノハ豫算其ノモノニ非スシテ此ノ條件ニ戻レル議決是レナリ、例ヘハ憲法第六十七條ノ歳出ハ若始メヨリ存セサレハ則チ可ナリ、苟モ存スルニ於テハ政府ノ同意ナクシテ廢除削減スルヿヲ得サルニモ拘ハラス若帝國議會ニ於テ政府ノ同意ナシニ削減又ハ廢除ノ議決ヲ爲シタリトセンカ、此ノ議決ハ憲法上議會ノ正當ナル職權ヲ以テ爲シタル議決ト認メサル所ナリ、憲法ハ政府ノ同意アルモノニシテ始メテ有效ノ議決タルヲ認メタリ、故ニ豫算議定案ノ奏上ニ際シ政府ニ於テ第六十七條ノ範圍内ニ於ケル或ル款項ノ廢除削減ニ對シ同意ヲ爲サヽリシコトヲ併セテ奏上スルトキハ元首ハ憲法第四條ト第六十七條トノ關係ニ因リ之ヲ以テ有效ノ議定ト看做スコトヲ得ス、然リト雖亦此ノ一部分ニ對スル議決ノ無効ナルカ爲ニ全体ノ豫算ヲ以テ無効ナリトスルコトヲ得ス、何トナレハ豫算ノ豫算タルヘキ体式ハ完具スレハナリ、前述ノ如ク憲法第六十七條ノ歳出ハ始メヨリ全ク存セストスル

モ豫算ハ尚ホ豫算ナリ、故ニ只タ憲法カ議會ノ議定權ニ對シ設ケタル條件ニ合ハサル議決ヲ以テ憲法上ノ議決ニ非スト看做サンノミ、夫レ然リ政府ノ同意セサル廢除削減ノ議決ニシテ果シテ無效ニ屬スルトキハ憲法ノ保證ニ係ル費額ハ豫算成立スルモノトス、或ハ論スル者アラン此ノ如キハ議會カ廢除削減セントシタル一款一項ニ關シ議會ノ協贊ヲ欠クノ場合ナリ、故ニ全体ノ豫算ハ無效ニ屬スト、答テ曰其ノ協贊ヲ欠クハ此ノ款項ニ付キ始メヨリ何等ノ決議ヲモ爲サヽル場合ニ在リ、既ニ議決シタルモノハ即チ議會カ既ニ其ノ協贊權ヲ行ヒタルモノナリ、只之ヲ行ヒタル結果ノ有效ナラサルノミト。但シ第六十七條中憲法上ノ大權ニ基ツケル歳出ニ關シテハ原案執行ノ文字較〻穩當ナラサル場合アリ、即チ前年度ノ豫算ニ於テ存セス隨テ未タ既定ニ至ラサルモノニ付テハ廢除削減ノ議決無效ニ歸シタル場合ニ於テ直ニ原案ヲ執行スルコトヲ得ス、何トナレハ大權ニ基ケル歳出中政府ノ同意ナキニ於テ廢除削減ノ議決無效トナルモノハ其ノ議定ニ至レルモノヽミニ限レハナリ。上述ノ次第ナルヲ以テ憲法第六十七條ノ歳出中議會カ廢除削減ヲ議定シ政府之ニ同意セサルモノニ關シテ

ハ法律ニ依リ又ハ法律上政府ノ義務ニ屬スル歳出ニ在リテハ直ニ原案ヲ採リ憲法上ノ大權ニ基ケル歳出ニ在リテハ原案中既定ニ至レル部分ヲ採リ以テ豫算ヲ裁可セラルヘキナリ。

以上第六十七條ノ歳出ニ對スル議決ニ付キ推論スル所ハ繼續費トシテ協贊ヲ求メタル場合ニ對スル議決及現額皇室經費ニ對スル議決ニモ適用スヘシ、即チ繼續費ヲ減廢セントセス繼續費トシテ協贊ヲ求ムルヲ不可トシテ爲シタル議決ハ無效ナリ、又皇室經費ノ增額ヲ要スル場合ノ外其ノ現額ヲ減廢セントスルノ議決モ無效ナリ、故ニ此等ノ場合ニ於テモ亦豫算ハ現在ノ定額ニ依リ成立スヘキモノトス。

○裁可ト同意トノ別。　豫算ニ對スル政府ノ同意ハ其ノ裁可ト同一ナリヤ否トハ新聞紙面ニ屢々現ハルヽ所ノ問題ナルカ、其ノ差別ハ第三十八條ニ於テ天皇ト政府トノ差別ニ付キ論辯スル所トニ依リ推究スレハ自ラ明瞭ナルヘシ。抑〻豫算ノ裁可ハ法律ノ裁可ト全ク別物ニシテ其ノ果シテ正式ニ合ヘル國家ノ豫算タルコトヲ公證スル所以ナリ、同意ハ政府カ責任行政ノ範圍内ニ於テ帝國

議會ヲシテ憲法第六十七條ノ歳出ニ關シ廢除削減ノ有效ナル議決ヲ爲スコトヲ得セシムル所以ナリ。

豫算ニシテ其ノ体式ニ關スル憲法ノ條規ニ違ハサルモノハ當然之ヲ裁可セサルヘカラス、憲法ハ不裁可ノ爲ニ豫算ノ成立セサル場合ヲ豫期セサルコト別論スル所ノ如シ、然ルニ廢除削減ノ同意ニ至リテハ之ヲ爲スモ爲サヽルモ全ク政府ノ權内ニ在リ。

裁可ハ公證スヘキモノヲ公證スルノ義ナルヲ以テ責任ナク假令事實ニ於テ公式ヲ缺クコトヲ後ニ至リ發見スルモ元首ノ一旦公證シタル所ハ永ク國家ノ標準タルヘク之ヲ取消スノ道ナシ、只タ陛下左右ノ官司ニ於テ規諫ノ責ニ任スヘキノミ、之ニ反シテ政府ノ表シタル同意ニ對シテハ政府其ノ責ニ任セサル可カラス、即チ廢除削減ノ爲ニ大權ノ施行ヲ障クルコトナク又法律ノ結果タル支出ヲ爲シ政府財政上ノ義務ヲ全クスルニ於テ缺ク所ナキノ責ニ任セサルヘカラス、裁可ト同意トノ差別略ホ斯ノ如シ。

○追加豫算。　第二回ノ帝國議會ハ豫算ヲ議定セスシテ解散セラレ、爲ニ廿五年

度ノ豫算ハ成立ニ至ラサリキ、政府ハ廿五年度ニ於テ支出ヲ要スルノ事業ニシテ廿四年度ノ豫算ニ載セサル所ノモノニ就キ追加豫算ヲ提出シテ議會ノ協賛ヲ求メタリ、是ニ於テ追加豫算ナルモノハ憲法上果シテ如何ナル性質ニ出ツルモノナリヤハ一ノ同題トナレリ、第一ニ注目スヘキハ追加豫算ナル者ハ憲法ニモ會計法ニモ規定セサル事件ニシテ畢竟財政上ノ慣例ニ基クモノナルコト是レナリ、憲法ノ精神ヨリ論スレハ國家一年ノ收支ハ悉ク豫算ニ編入スヘキモノニシテ若シ此ノ外ニ止ムヲ得サルノ支出アルトキハ豫算外ノ支出ヲ爲シ後ニ帝國議會ノ承諾ヲ經ヘキモノナリ、故ニ既ニ本豫算案ヲ提出シタルノ後ニ於テ提出スル收支ノ案ハ假令追加豫算ノ名ヲ假ルトモ其ノ實ハ豫算ニ關係スル所ナク、一種ノ收支協賛案トシテ視做サルヘキモノナリ。

然レ𪜈此ノ協賛ヲ經タルトキハ其ノ案ノ各款各項ハ本正豫算ノ款項ノ間ニ挿入セラルヘキ筈ナルヲ以テ既ニ挿入シタル上ハ茲ニ始メテ豫算タルノ性質ヲ受クルモノト知ルヘキナリ。

是ヲ以テ未タ議決ニ至ラサルノ前ニ在リテハ憲法及會計法ニ於ケル豫算ノ規

程ハ一モ追加豫算案ニ適用スルコトナク、唯タ政府提出ノ議案トシテ取扱フヘキモノナリ。

○貴族院修正權。第三回ノ議會ニ於ケル最大問題ハ貴族院ノ修正權ニ關シタリ、即チ衆議院ヨリ追加豫算ノ二款ヲ削除シテ之ヲ貴族院ニ廻送シタルニ當リ貴族院ハ政府ノ原案ニ復シ修正トシテ更ニ衆議院ニ返送シタリ、然ルニ衆議院ハ之ヲ以テ新款ノ挿入ナリトシ修正トシテ再ヒ議題トスルコトヲ拒ミ、貴族院ニ向テ其ノ案ヲ返付シタリ、依テ貴族院ハ憲法上ノ疑義トシテ左ノ上奏ヲ爲セリ。

[貴族院議長臣茂詔誠恐誠惶貴族院ノ決議ヲ以テ恭ク叡聖文武天皇陛下ニ上奏ス本院ハ政府ヨリ提出シ衆議院ヨリ送付シタル明治二十五年度歳入歳出總豫算追加案ヲ議スルニ當リ衆議院ノ削除シタル海軍省所管第一款軍艦製造費及文部所管第二款震災豫防調査會設備費ノ兩款ヲ急要ノ歳出ナリト認メ憲法ニ依リテ與ヘラレタル協賛ノ權ニ依リ政府ノ原案ニ基キ衆議院ノ修正案ヲ修正シ議院法第五十五條ニ依リ衆議院ニ移シタリ抑豫算案ハ前ニ衆議院ニ提出サラル、ノ外憲法上豫算ニ對スル協賛ノ職權ニ於テ兩院ノ間ニ輕重スル所ナキヲ信シ又此職權

ニ依テ修正ヲ行フニ當リ政府ノ提出セル原案ノ欵項ヲ復スルニ付テハ法律上何等ノ制限ナキヲ信ス是ヲ以テ本院ハ憲法ノ命スル職務ヲ盡シ且議院法ノ手續ヲ履ミ以テ衆議院ノ同意ヲ求メタリ然ルニ衆議院ハ更ニ之ヲ挿入シタルハ不合法ノ議決ナルヲ以テ回付ヲ受クヘキモノニアラストシテ返附セリ本院ニ於テハ本院ノ議決ヲ合法ノモノト確信スルヲ以テ更ニ之ヲ衆議院ニ回付シタルニ衆議院ヨリ再應返付シ兩院ノ所見遂ニ相合フ能ハサルニ至レリ

今憲法上ノ疑義ニ關シ兩院ノ所見互ニ相合ハス從テ憲法ノ進行ヲ現在及將來ニ妨クルノ懼アルニ於テ本院ハ謹テ狀ヲ具ヘ上奏シ仰テ聖明ノ親裁ヲ待ツアルノミ恐懼ノ至ニ堪ヘス謹テ上奏ス」

是ニ於テ天皇ハ樞密院ニ諮詢シテ勅裁アラセラレタリ、之ヲ本邦ニ於ケル憲法爭議ノ嚆矢トス、蓋憲法上ノ爭議ハ政府ト議會トノ間ニ於テ起ルヲ普通ノ場合トスレト今回ノ實例ハ議會ノ一院ト他ノ一院トノ間ニ於テモ亦起ルモノナルコトヲ證明シタリ、勅裁ノ文ニ曰

「其院六月十一日附ノ上奏ノ件ハ憲法上ノ疑義ニ屬スルヲ以テ朕ハ樞密顧問ニ諮詢シタリ樞密顧問ハ憲法第五十六條ニ依リ議決シテ上奏スルコト左ノ如シ

憲法上豫算ニ對スル貴族院及衆議院ノ協贊權ハ我帝國憲法第六十五條ニ依リ衆議院ハ貴族院ニ先チテ政府ヨリ豫算案ノ提出ヲ承クルノ外兩院ノ間ニ軒輊スル所ナキモノナリ

故ニ後議ノ議院ハ前議ニ對シテ何等羈束セラルヽコトナク從テ前ノ議院ニ於テ削除セル欵項ヲ存留スルハ素ヨリ後議ノ議院ノ修正權內ニ屬スヘキモノトス但後議ノ議院ハ前議ノ議院ニ對シ議院法ノ命スル所ニ依リ同意ヲ求ムルヲ以テ唯一ノ手續トスルノミ

朕ハ此ノ樞密顧問ノ議決ヲ採納シテ其院ノ上奏ニ答ヘ之レヲ了知セシム」

此ノ勅裁ノ体裁ニ就キ注意スヘキモノアリ、即チ爭議ニ對スル判決ノ体裁ニ出テスシテ一院ノ質疑ニ對スル憲法解釋ノ体裁ヲ爲シタルコト是レナリ、故ニ毫モ執行ノ効力アルニ非ス、貴衆兩院ノ之ヲ遵奉スルト否トハ全ク其ノ自由ニ存シタリ。樞密院ハ唯タ聖問ニ奉答シタルノミ、一モ兩造ノ間ニ立チテ裁決ノ地位ヲ取リタルニ非サルナリ。

○豫算一部不成立ノ結果。貴族院ノ政府原案ニ於ケル二欵ヲ留存シタルハ新欵ヲ加ヘタルニ非スシテ衆議院ノ議決案ヲ修正シタルモノナリト勅裁アリタル以上ハ貴族院ハ更ニ其ノ院ノ修正案ヲ以テ衆議院ノ同意ヲ求ムヘク、彼レ同

意セサルキハ則チ兩院協議會ヲ開クヲ以テ議院法第五十五條以下ニ規定シタルノ順序トス。是ニ於テ若シ此ノ協議會ニ於ケル成案ニシテ一院又ハ兩院ノ同意ヲ得サルトキハ追加豫算ノ一部分ハ不成立トナルヘシ、果シテ然ルトキハ全体ニ渉リテ不成立トナルヘキヤ否ト云フコト一ノ問題ナリキ。協議會ハ開カレタリ而シテ其ノ成案ハ兩院ノ同意ヲ得タリ、然レトモ若シ不幸ニシテ此ノ結果ヲ見サルトキハ則チ如何ト云フコト公法學者ノ豫メ講究スル所ナリキ。豫算又ハ追加豫算ノ一部ノ否決セラルヽハ全体ノ成立ニ關係ナシト雖協議會成案ノ不同意ハ全ク之ト異ナリテ其ノ一部ハ否決トモ可決トモ定マラサルモノト成ルナリ、故ニ全体ノ隊算又ハ追加豫算ノ此ノ一部ノ未決ノ爲ニ不成立ニ至ルコト無論ナリ。何トナレハ事茲ニ至ルトキハ孰レノ一院ヨリモ豫算上奏ノ手續キニ至リ難ケレハナリ。

然レトモ豫算ト追加豫算トノ間ニ少差アリ。本正豫算ハ會計法ニ依リ一括シテ提出スヘク、之ヲ分割スルコトヲ得スト雖其ノ追加ニ至リテハ必ズシモ之ヲ一括スルノ必要ナク、政府ノ便宜ニ依リ幾回ニ分チテ提出スルモ不可ナキコト

ナルニ因リ政府ニ於テ若シ一部不成立ノ爲ニ全体ノ不成立トナランコトヲ恐ルレハ之ヲ數號ニ分チテ提出スルニ如カサルナリ。若シ此ニ出テスシテ第三回議會ニ於ケル如ク一括シテ提出シ議會モ一括シテ議決シタルニ於テハ恰モ本豫算ニ於ケルカ如ク一部ノ爲ニ全部成立セサルノ結果ヲ避ケ難キナリ。

第七章　補則

此ノ一章ハ此ノ憲法ニ規定シタル權利義務ノ關係ノ未タ有ラサル時ヨリ既ニ有ルノ時ニ移ル次第及其ノ他日稍異ナル關係ニ移ラントスルニ及テ必要ナル條件ヲ確定ス。

第七十三條　將來此ノ憲法ノ條項ヲ改正スルノ必要アルキハ勅命ヲ以テ議案ヲ帝國議會ノ議ニ付スヘシ

此ノ場合ニ於テ兩議員ハ各其ノ總員三分ノ二以上出席スルニ非サレハ議事ヲ開クコトヲ得ス出席議員三分ノ二以上ノ多數ヲ得ルニ非サレハ改正ノ議決ヲ爲スコトヲ得ス

此ノ一條ハ憲法改正ニ關スル議案提出ノ權ヲ天皇ノ特有ニ歸スルモノニシテ政府及帝國議會ハ改正ノ必要ヲ見ハ之ヲ上奏スルコトヲ得ルモ自ラ案ヲ立ツ

ルヿヲ得サルナリ。其ノ字句ヲ密ニ分析セハ左ノ要件ヲ得ヘシ。(聖勅ノ解說ヲ對照スヘシ)

(一)、改正ハ必ス十分ノ必要アル時ニ於テスヘキ事

(二)、改正ノ案ハ元首ノ發議ニ限ルヘキ事

(三)、改正ノ案ヲ決スルハ必ス帝國議會ノ協贊ヲ經ヘキ事

(四)、改正ノ案ニ用ヰル協贊ノ手續ハ出席可決トモニ三分ノ二以上ノ多數ヲ要スル事

(五)、或ル條項ヲ改正スルヿヲ得ヘク、憲法全体ヲ廢棄變更スル能ハサル事

本條ニ於テ頗ル注意スヘキハ憲法改正ノ爲ニ議會ノ協贊ヲ經ルハ是レ議會ノ一種特別ノ官能ニシテ普通立法ノ作用ニ非サルコト是レナリ、是ヲ以テ普通法律ノ議決ニ用ヰル規程ハ一モ直接ニ憲法改正案ノ議事ニ適用セサルナリ。

方今ノ學說ハ憲法ハ容易ニ變更スルノ不可ナル論ヲ竢タスト雖、亦國家ノ性質ニ於テ永ク之ヲ一樣ニシテ變更ナカラシムルハ到底難ク、且ツ如何ハカリ嚴重ナル條項ヲ以テ變更ヲ防キオクモ眞ニ變更ヲ要スルノ日至ルトキハ更ニ用ヲ爲スモノニ非スト云フニ歸着セリ。シユルチエ曰「變更ヲ難クスルノ條項ハ實

効ナキノミナラス却テ弊害アリ、即チ平時ニ在テハ之カ爲ニ有益ニシテ而モ必要ナル改正ヲ障止シ政治激動ノ時若クハ革命ノ時ニ在テハイカニ嚴重ナル規程モ一擊ノ下ニ効力ヲ失ヘリ。夫ノ佛國憲法ノ凡ソ用ヰ得可キ嚴重ノ語ハ悉ク之ヲ用ヰテ變更ヲ禁シタルニモ拘ハラス千七百九十一年以來果シテ幾度變更シタルヤヲ知ラス、之ニ反シテ英國ニ於テハ成文スラ無キニモ拘ハラス憲法ノ實ハ數百年ヲ經ルモ確固トシテ動カズ、而モ時ニ新規ノ條項ヲ加ヘ、時運ニ從テ啓發スルコト最モ自由ナリ、憲法ト通常法律トノ差違ハ英國ノ知ラサル所ナリ」ト。

又之ヲ各國ノ憲法ニ參照スルニ大抵改正ノ道ヲ設ケサルモノナシ。(威巴里第十章第七條、白耳義第百三十一條、荷蘭第百九十六條、普魯西第百七條、丁抹第九十五條參看)

①憲法改正ニ關スル問題二アリ、其ノ第一ハ憲法ニ違反スルニモ拘ラス議會之ニ協贊シ天皇之ヲ裁可シテ公布シタル場合ハ如何ト云フ是レナリ。此ノ問題ニ對スル現今國法學上ノ答辯ニ曰「憲法違反ノ法律タリトモ普通ノ手續ヲ以テ之ヲ議決シ元首之ヲ裁可シタル場合ニ於テハ其ノ法律タルノ効力ハ完全ナリ、

故ニ米國ニ於テノ如ク憲法ニ反對ノ明文アルニ非サルヨリハ裁判官モ之ヲ適用セサルヲ得ス、其ノ他ノ官吏ニ至リテモ皆之ニ遵由スルノ義務アリ、且夫レ裁可ハ元首ノ大權ニシテ元首ハ神聖侵スヘカラサルニ依リ憲法違反ノ法律ヲ裁可シタルモ其ノ責ニ任セス、國務大臣ハ法律遵奉ノ責ニ任セシムヘキモ法律制定ノ責ニ任セシムルコトヲ得サルナリ、故ニ憲法違反ノ此ノ道ニ依テ事實トナレル場合アルモ恢復ノ道ナキハ國法ノ尙ホ未タ十分ニ進歩セサルノ一點ナリトス。

エリツネク法律命令論第二百六十三項ニ曰、

「形式上ノ憲法ニ於テ設ケタル立法ノ制限ハ絶對的ナラサルヲ通例トス。即チ難澁ナル形式ヲ守ルニ於テハ如何ナル憲法上ノ規程ト雖之ヲ廢止變更中止スヘク、又格段ナル一個ノ場合ニ向テ其ノ効力ヲ停止スヘク、又先ツ憲法中ノ條項ヲ廢止セスシテ特別ノ法律ヲ以テ其ノ効力ヲ減スルコトヲ得ヘシ。

論者多ク反對ノ見解ヲ取ルト雖形式上ノ憲法ヲ有スル各國ノ議院ノ慣例ハ果シテ法律ヲ以テ憲法ノ効力ヲ減スルコトヲ許セリ。且多クノ國家ニ於テハ憲法改正ノ形式ヲ守ラスシテ制定

セラレタル法律ニモ形式上自餘ノ法律ト同一ノ効力アリトセサルヲ得ス、即チ裁判官ニ於テ法律ノ憲法ニ準合スルト否トヲ審査スルノ權ナキ諸國ニ於テハ皆斯クノ如シ」

同書第四百五條ニ又曰、

「今若裁判官ノ法例審査權ヲ以テ法律ノ實体上及形式上ニ於テ憲法ニ準合スルト否トヲ判別セシムルニ足ラストセハ遂ニ立法上ノ政畧ニ關シ起ル所ノ問題ハ他ナシ、少クトモ形式上ニ於テ各般ノ法律ヲシテ憲法ニ準合セシムル爲ニ特別ノ設營ヲ定ムヘキヤ否ト云フヿ是レナリ、例ヘハ法律公布ノ前ニ於テ其ノ体裁ヲ精査スルノ權力ヲ具ヘタル機關ヲ置クモ其ノ一方ナルヘシ。今其ノ方法ヲ論究スルハ本論ノ範圍外ナリト雖茲ニ一言スヘキハ他ナシ、立憲國家ニ於テト雖憲法ヲ變更スルノ法律タリナカラ規定ノ難澁條件ヲ守ラスシテ裁可公布セラレ或ハ議會ノ議決セサル法律ノ原文タリナカラ法律トシテ發布セラレ、或ハ發布ノ際印刷ヲ誤ル如キハ屢〻起ル場合ニシテ而カモ其ノ責ニ任スル者アラサルナリ」

凡ソ斯クノ如ク故造ノ惡意ナク寧ロ錯誤ニ依テ起ル所ノ法律ノ憲法違反ニ對シテハ各國現行ノ法度ニ於テ十分ナル防杆ノ策ヲ欠ケリ、而シテ關係ノ機關ニ於テ恢復ノ手段ヲ爲サヽル以上ハ憲法ニ違反シテ成立シタル法律タリトモ其

ノ形式上幷ニ實体上ノ效力ニ於テ憲法ニ準合スルノ法律ト敢テ異ナル所ナシ。故ニ將來法律ノ制定ヲシテ憲法ニ準合セシムル所以ノ形式上ノ條件タル權義準則ヲシテ一層有效ナル擔保ヲ得セシメナカラ爲ニ弊害ヲ招クコト莫ラント欲セハ則チ如何ンスヘキト云フハ十分考量ヲ要スルノ問題ナリ、而シテ今裁判官ノ審査權ヲ强クスルトキハ必ス弊害ノ之ニ隨テ生スヘキハ疑ヲ容レサルナリ。

憲法改正ニ關ル第二ノ問題ハ憲法附屬ノ法律ノ改正ニ關ス、即チ憲法附屬ノ法律ハ一般法律ニ比シテ國家根本ノ編成ニ關係スルコト更ニ密接ナリ、故ニ其ノ改正モ亦一般法律ノ改正ト異ナルノ手續ニ依ルヲ相當トスルニ似タリ、是ヲ以テ外國ニ於テハ往々明文ヲ以テ其ノ改正ヲ難澁ニシタリ、左ニ一二例ヲ示サン。

巴威里千八百二十八年三月九日議院法第三條　此ノ法律ハ本邦根本法ノ一トシテ且憲法ヲ增補スルノ法章トシテ見做サルヘシ。此ノ法律ハ官報ニ公布ノ日ヨリ効力ヲ有シ憲法第十章第七條ニ規定シタル法式ヲ以テスルニ非サレハ變更スルコトヲ得ス

同國千八百三十四年七月一日永久王室經費ニ關スル法律第九條　此ノ法律ハ本邦ノ根本法ノ一トシテ見做サルヘク其ノ効力ハ此ノ法律ノ各條項ヲ以テ憲法ノ本

文ニ加ヘタル場合ト同一ナルヘシ

同國千八百四十八年六月四日大臣責任法第十四條　此ノ法律ハ官報ニ公布ノ日ヨリ有効ナルヘク憲法ノ增補トシテ且本邦ノ根本法トシテ見做サルヘク憲法第十章第七條ニ規定シタル形式ヲ以テスルニ非サレハ變更セサルヘシ

巴丁憲法第六十四條　凡ソ憲法ヲ增補シ、解釋シ變更スル法律ハ議會ノ兩院ニ於テ出席員三分ノ二ノ同意ヲ經ルニ非サレハ議決スルヲ得ス

同國千八百七十九年二月十四日裁判官權利關係法第十九條　此ノ法律ハ憲法及千八百十九年一月三十日ノ官吏法ノ一部分ヲ爲シ司法大臣ニ於テ其ノ執行ノ責ニ任ス

ヘツセン憲法第百十條　憲法ノ變更及解釋ハ必ス兩院ノ一致ヲ以テ之ヲ行フヘク下院ニ於テハ少クトモ二十六人ノ同意ヲ要シ上院ニ於テハ少クトモ十二人ノ同意ヲ要ス云々

同國千八百六十二年七月十五日ノ保安法第二條　本法第一條ハ憲法ノ一部分ヲ爲スモノトス

同國千八百七十二年十一月八日議院及選擧法第五十一條　第一條乃至第十七條第十九條第三十三條第四十五條第四十七條乃至第四十九條ノ規程ハ之ヲ憲法ノ一部分ト看做ス

フロンシワエヒ千八百五十一年十一月二十二日議院法第二十八條第二項　本法ノ規定ハ國家根本法ノ一部分ヲ爲シ國家根本法ト同一ノ手續ヲ以テ公然解釋シ變更シ又ハ廢止セラルヘキモノトス

然ルニ歐洲二三ノ邦國並ニ本邦ニ於テハ普通法律ト憲法附屬法律トノ差別判

然ナラス、隨テ其ノ改正ノ手續モ亦一定セス。憲法制定以來今日ニ至ルマテノ事實ヲ以テ之ヲ論スレハ「憲法及憲法附屬ノ法律」ナル語ハ既ニ樞密院官制第六條ニ於テ之ヲ用ヰタリ、故ニ本邦ノ國法上ニ於テ既ニ其ノ範圍一定セルモノト看做サヽルヲ得ス。暫ク現在ノ解釋法ニ依レハ憲法ト同時ニ發布セラレタル諸ノ法律、勅令即チ議院法、貴族院令、衆議院議員選擧法、及會計法ヲ以テ憲法附屬ノ法律勅令ト稱セシムルモノヽ如シ。然レモ發布ノ同時ハ必シモ憲法附屬ノ法令タルト否トヲ判別スル所以ニ非サルニ似タリ。此ノ差別ハ寧ロ之ヲ憲法ノ條項ニ求ムヘキニ似タリ。憲法ノ條項ヨリ見レハ帝國議會ニ關シテ議院法ノ重キヲ認メ、貴族院ニ關シテ貴族院令ノ重キヲ認メ、衆議院ニ關シテ撰擧法ノ重キヲ認ムルト同樣ニ樞密院ニ關シテハ樞密院官制ヲ重キニ置クヘキニ似タリ、而シテ會計法ニ至テハ憲法ハ曾テ之ヲ認メサルナリ。故ニ憲法ノ規定ヲ以テ標準トスルトキハ少クトモ樞密院官制ハ之ヲ憲法附屬ノ勅令ト看做シ會計法ハ之ヲ普通ノ法律ト看做スヘキニ似タリ。

次ニ憲法附屬ノ法律勅令ヲ改正スルノ手續ニ至リテハ本邦ニ於テ特別ノ規定ヲ設ケス、憲法第七十三條ハ只將來此ノ憲法ノ條項ヲ改正スルノ必要アルトキ」トノミ云ヒテ外國ノ憲法ニ於テノ如ク解釋增補ノ場合ヲ云ハス、故ニ現今ノ成法ニ於テハ所謂難澁規程ナルモノハ附屬法令ノ改正增補ニ及ハスト謂ハサルヲ得ス。

憲法改正ノ手續ヲ附屬法令ノ改正ニ及ホサヽルハ想フニ是レ七十六條ノ外如何ナル法律ト雖之ヲ憲法ト認メサルノ主義ナルヘシ、然レトモ此ノ主義ノ果シテ國家ノ性質ニ適ヒ、敢テ間然スヘキナキヤ否ハ尚ホ討究ヲ盡スノ後ニ非サレハ定知シ難シ。國法學者多數ノ論ニ依レハ憲法ノ名目ヲ以テ制定セラレタルモノヽミ必シモ憲法ナルニ非ス、凡ソ權義準則ノ憲法タルト否トハ國家編成ノ根本ニ關係スルト否トヲ以テ之ヲ判別スヘシ、即チ明ニ憲法ノ名ヲ以テ制定セラレタルモノ即チ形式上憲法タルモノヽ外、別ニ實体上ノ憲法ナルモノ在リテ存ス、而シテ就中國務大臣ノ責任ヲ論スルノ學者ハ憲法違反ト云フ中ニ形式上ノ憲法ニ對スル違反ノミナラス實体上ノ憲法ニ對スルモノヲモ含蓄セシメントス。

○エリネック法律命令論第二百六十二條ニ曰「通例ノ立法事業ノ爲ニ設ケタル規程ハ或ル類ノ法律ヲ消滅セシムルノ効力ヲ有セス。此ノ制限ハ通例國憲法「ヘルフワスングスゲゼッツ」ニ於テ之ヲ設ケタリ。國憲法ノ本義ハ二重ナリ、即チ實体上ノ國憲法幷ニ形式上ノ國憲法ナルモノアリ。實体上ノ國憲法トハ國家根本ノ編成ヲ定メ、及國家直接ノ機關ノ權限ヲ制スルモノ是レナリ。此ノ意味ニテ言ヘハ凡ソ國家ハ成文ノ憲法ヲ存スルト否トニ拘ラス又一部分ハ之ヲ法章ニ編成シタルト否トニ拘ラス必ス國憲法(密ニ言ヘハ國憲的權義典則)ナルモノアリ。之ニ反シテ形式上ノ意味ニテ言ヘハ其ノ變更ニ關シ難澁ノ法式ヲ以テセンコトヲ要スルモノノミニ限レリ、即チラバンドノ適當ナル語法ヲ以テ之ヲ言ヘハ高度ナル形式上ノ法力ヲ有スルモノヽミニ限レリ。此ノ意味ニテ言ヘハ英國ハ未タ曾テ憲法ヲ有セサルナリ」ト。

第七十四條　皇室典範ノ改正ハ帝國議會ノ議ヲ經ルヲ要セス

皇室典範ヲ以テ此ノ憲法ノ條規ヲ變更スルコトヲ得ス

皇室典範ノ帝國憲法ニ於ケル曾テ典範ハ憲法附屬ノ法章ナリト論シタルモ再

考スレハ是レ憲法ノ附屬ニ非ス、寧ロ其ノ一部分ヲ爲シ、而シテ憲法ノ本源ヲ爲セルモノナリ、何トナレハ日本憲法ハ純然タル欽定憲法ニシテ君主ノ全權ヨリ出テ、典範ハ君主全權ノ由來及傳承ノ次第ヲ明記スルモノナレハナリ。典範ヲ以テ憲法ノ一部分ナリト爲スハ即チ憲法ニ於テ其ノ典範ニ對スル交渉ノ場合ヲ規定シタル本條ノ在ルアリ、而シテ憲法ト典範トノ間ニ効力ノ輕重ヲ認メサルニ因ル、是レ典範ノ他ノ附屬法令ニ異ナル所ナリ、他ノ附屬法令ニ至リテハ其ノ條項ハ普通ノ立法作用ヲ以テ變更スルコトヲ得ヘク、又將來ニ於テハ憲法改正ノ手續ヲ經スシテ憲法ニ違反スル條項ヲ含蓄スルノ改正ヲ爲スコトヲ得ス、之ニ反シ皇室典範ハ憲法ニ變更ヲ及ホサヽル限リハ皇族ノ權利關係ニ於テ憲法ニ違反スル改正ヲ其ノ條項ノ上ニ施スコトヲ妨ケス、例ヘハ皇族ノ居住移轉ノ自由ニ對スル束縛ノ如シ。

學者ノ論ニ曰「君主ノ家憲ニハ其ノ家族法及相續法ヲ揭ケタリ、而シテ此ノ二法ハ私法ニ屬スルヲ例トスル點ヨリ見レハ君主家法ノ此ノ部分ハ私法ニ屬スルコト明ナリ、故ニ之ヲ實際ニ適用スルニ當テハ往々私法ノ原則ヲ以テ之ヲ補充

セサル可カラス、然レモ又他ノ一方ヨリ觀ルトキハ君主家法ハ國法ニ屬スルモノトス、何トナレハ君主家法ハ國家ニ勢力ヲ及ホシ、政治ニ關係ヲ有スルモノナレハナリ、故ニ又之ヲ國法中ニ論列スルヲ常トス、君主家法ニ此ノ兩樣ノ性質アルハ世襲君主國ノ本質ニシテ國家統治權ノ主格ト相續法ノ如キ私法上ノ原則トヲ混和シテ一体ト爲シタルモノナリ」ト。

斯ク我カ帝國ノ君主家法、即チ皇室典範ハ一方ヨリ見レハ國法ニ屬シ憲法ノ一部ヲ爲スト雖、其ノ改正ハ前條ニ述ヘタル憲法改正ノ手續ヲ以テ改正スヘキ限ニ在ラス、何トナレハ典範ハ君位ニ關係スルヲ以テ憲法ニ之ヲ引用スト雖、亦一方ヨリ見レハ是レ君家ノ私法ニシテ君家獨立ノ制作ニ屬シ、臣民ノ公議ニ付スヘキニ非サレハナリ。皇室典範ノ條項ノ改正增補ハ其ノ第六十二條ニ依リ將來必要ノアルニ當テ皇族會議及樞密顧問ニ諮詢シテ勅定セラルヘキ所トス、即チ天皇ニ於テ皇族ノ家長タル權利ヲ以テ之ヲ獨決シ玉ヘルモノニシテ皇族會議ト樞密顧問トハ唯タ意見ヲ上奏スルノミ、確決ノ權アルニ非サルナリ。然リト雖國家モ亦獨立ノ編制アリテ一定ノ手續ヲ經ルニ非サレハ變更ス可カラサ

ルモノタルヘシ、然ラサレハ憲法ノ擔保ハ此ノ一點ヨリ破レテ君主隨意ニ國憲ヲ動カスノ道ヲ開カントス、是ヲ以テ皇室典範ノ改正ノ爲ニ憲法ノ條項ヲ變更スルコトヲ得サラシメタリ。

憲法ト典範トノ關係ハ斯ク兩々相侵サヽルニ在リテ甚タ灼然ナリト雖、更ニ精密ナル講究ヲ要スルモノハ則チ典範ト法律トノ關係ナリ。典範ハ皇族ノ相續ニ關シ規程ヲ設ケタリ、然レモ民法中ニモ既ニ相續上ノ規程アリ。典範ハ皇族ヲ勾引シ又ハ之ヲ裁判所ニ召喚スルニ勅許ヲ必要トセリ、然ルニ是ノ如キハ普通訴訟法ニ對スルノ變例ナリ。典範ハ世傳御料ト定メラレタル土地物件ノ分割讓與ス可カラサルヲ規定セリ、是レ國家公益ノ爲ニ土地ヲ分割セシムルノ法律(例ヘハ土地收用法)ニ對スル變例ナリ。又凡ソ國家ノ臣民ハ國家ニ對シ兵役ト納稅トノ義務ヲ盡スヘク、至尊ヲ除クノ外皇族ト雖皆臣民ナリ、而シテ現ニ各國ニ於テ皇族ハ此等ノ義務ヲ特免セラルヽノ場合多シ。其ノ他皇室典範ノ旨趣ヲ貫徹セシメントスルトキハ即チ國家ノ法律ニ違ハンコトヲ要スル場合多々アリ、此等ハ如何シテ可ナラント云フコト一ノ問題ナリ。

皇室典範ハ皇族ノ家法ナリ、而シテ普通ノ家法ハ以テ國家ノ法律ニ對スルノ變例ヲ設クルコトヲ得ス、例ヘハ華族ノ某家ノ家法ニ於ケル相續ノ規程ノ如キハ決シテ民法相續編ノ條項ニ違背スルコトヲ得サルモノナリ、然リト雖皇族ノ家法タル典範ハ此ノ點ニ於テ普通ノ家法ト相同シカラサル所以ノモノアリ、即チ天皇ハ臣民ニ非サルト典範ハ一方ヨリ見レハ憲法ノ附屬部分ナルト是レナリ。第一ニ天皇(及皇后)ハ國ノ元首ニシテ其ノ臣民ニ非ス、隨テ臣民ノ權利義務ヲ規定スルノ法律ハ一モ元首ニ及フコトナシ。民法ノ如キモ元首ハ之ヲ裁可シタルニ止マリ、自ラ之ニ遵由センコトヲ誓ヘルニ非ス、故ニ相續財產等ノ規程ハ一モ元首ノ元首トシテノ相續及資財ニ及フコトナシ、即チ皇位繼承、神器相傳、及世傳御料ノ事ノ全ク普通法律ノ外ニ在ルハ此ノ故ナリ。夫ノ神器ハ元首寶祚ノ標章ニシテ一人ノ所有ニ非ス、從テ所有法ノ及ハサル所ナリ。又夫ノ世傳御料ハ天皇ノ位ニ附屬スルモノナルヲ以テ一般稅法ノ及フ所ニ非ス、又國家ノ公益ニ關スル法律ヲ以テ之ニ加ヘ難シ、何トナレハ此ノ法律ハ臣民ニシテ始メテ恪守ノ義務アル所ナレハナリ。但シ天皇ノ所有ト雖其ノ御位ニ屬セサルモノ、即

チ御私有トシテ所領アラセラルヽ所ハ國家一般ノ法律ニ從ハサルヲ得ス、即チ普通帝室御料ハ諸稅法幷ニ土地收用法ヲ適用スルナリ。

第二ニ皇室典範ハ上述ノ理由ニ因リテ憲法ノ一部分ヲ爲セリ、是ヲ以テ其ノ條項ハ悉ク普通法律ヲ變更スルノ効力ヲ有セリ。然レモ典範ハ未タ公布セラレタルモノニ非ス、而シテ有司及臣民ノ遵由ノ義務ハ公布ニ依リ始メテ生スルカ故ニ、典範ニ含蓄スル所ノ訴訟法ノ變例ノ如キハ裁判官及人民ニ於テ遵由ノ義務ナシト謂ハサル可カラス。是ヲ以テ典範ノ條項ハ元來尋常法律ヲ打消スノ効力アルニモ拘ラス更ニ其ノ變例ニ屬スル條項ヲ普通法律ノ一部トシテ公布スルノ必要ヲ生スルナリ、例ヘハ典範ノ第五十條ニ

「人民ヨリ皇族ニ對スル民事ノ訴訟ハ東京控訴院ニ於テ之ヲ裁判ス但シ皇族ハ代人ヲ以テ訴訟ニ當ラシメ自ラ訟庭ニ出ルヲ要セス」

トアルヲ重ネテ裁判所構成法ノ第三十八條ニ

「皇族ニ對スル民事訴訟ニ付第一審及第二審ノ裁判權ハ東京控訴院ニ屬ス但シ第一審ノ訴訟手續ニ付テハ地方裁判所ノ第一審手續ヲ適用ス」

トアリ又民事訴訟法第二百九十六條ニ

「皇族證人トナルトキハ受命判事又ハ受託判事其ノ所在ニ就キ訊問ヲ爲ス」（刑事訴訟法第百三十條參觀）

トアルカ如シ。然ルニ典範第五十一條ニ

「皇族ハ勅許ヲ得ルニ非サレハ匂引シ又ハ裁判所ニ召喚スルコトヲ得ス」

トアルニ新刑事訴訟法ニハ之ニ對スルノ一條ナシ、是レ法律ノ闕點ナリトス。

○次ニ皇室典範ニシテ果シテ普通法律ヲ打消スノ効力アルモノナランニハ何故ニ責任大臣ニ於テ之ニ連署セサルヤノ問題ヲ講究セサル可カラス。之ヲ一言セハ典範ハ元首ノ國家ニ對スル立法權ヨリ發スルモノニ非スシテ其ノ室家ニ對スル家長權ヨリ出ツルモノナリ、而シテ大臣ハ國家ノ機關ナルノミ元首ノ室家ニ關係セス、是レ國法上大臣ヲシテ典範ニ副署セシメサル所以ナリ。典範ニシテ國法上ノ關係ニ於テ政府人民ニ義務ヲ負擔セシムルコトアルモ之カ爲ニ上陳ノ意義ヲ變スルコトナシ、是レ國王ニ於テ國家ト王家トヲ連絡スルノ必要ヨリ生スルモノニシテ王家ノ家族法ヲ制定スルニ由リ同時ニ國法ノ一部ヲ制定スルニ過キス。且夫レ典範ヲ定ムルハ皇族首長ノ特權ニシテ唯憲法ヲ變

更スルコト能ハス、若之ヲ變更セハ則チ其ノ効力ヲ生セサルノミ、其ノ他ニ於テ如何ナル條項ヲ立ツルモ隨意ナリ、從テ國法ニ對スル責任ヲ生セサルハ是レ事實ニ於テ副署ヲ要セサル所以ナリ。特ニ憲法ノ一條ヲ以テ「皇室典範ヲ以テ此ノ憲法ノ條項ヲ變更スルコトヲ得ス」ト云ヘル以上ハ萬一憲法ニ違背セルノ條項ヲ制定スルニ至ルモ、國家及臣民ハ之カ爲ニ拘束ヲ負フコトナク、其ノ規定ハ皇族ニ對スルノ外臣民ニ向テ之ヲ實施スルノ道ナシ、從テ國家ニ對シ責任ヲ取ルヘキノ實ヲ生セサルナリ。外國ニ於テ君主家法ヲ公布スルトキ諸大臣又ハ一大臣之ニ連署スルハ事務上ノ効力又ハ政略上ノ効力アルノミ、國法上ノ効力アルニ非ス。普魯西ニ於テハ王家ノ事ハ一モ政務ト看做サヽルカ故ニ憲法上ノ事務執行ニ係ル原則ヲ一モ之ニ適用セサルハ近時國法ノ模範トスル所ナリ。

第七十五條　憲法及皇室典範ハ攝政ヲ置クノ間之ヲ變更スルヿヲ得ス

攝政ノ權限如何ハ國々ノ慣例ニ依ルコトニシテ國法上必スシモ一定ノ規模アルニ非ス、普魯西ニテハ本條ノ如キ明文無キヲ以テ尋常ノ手續キヲ經テ憲法ヲ改正スルモ亦其ノ權內ナリト云ヘリ、（シユルチエ所說）之ニ反シテウルテンブル

ヒ憲法第十五條ニ於テハ憲法ノ條項ヲ變更スル攝政ノ處分ハ唯タ其ノ在職ノ間ノミ有効ナルモノトシ、又授爵ノ權ヲ制限シ、樞密顧問ヲ免職スルヿヲ得サラシム。

ポルンハツクニ依レハ（普國々法論第一卷第百九十六條）攝政ハ重モニ元首ナキノ時ナカラシメンカ爲メ設ル所ナリ、サレハ「凡ソ統治者ニ屬スル各般ノ權利ハ皆攝政ニ於テ之ヲ行フヘキモノトス、何トナレハ攝政ヲ置クノ間眞ノ統治者（即チ幼主又ハ重患ノ君主）カ自ラ行フヘキノ權利トテハ一モ留存セサレハナリ、即チ現時ニ於ケル國家ノ觀念ニ適合スルモノハ斯ク攝政ヲシテ各種各般ノ權利ヲ行ハシムルニ在リトス、獨乙ノ或ル諸邦ノ憲法ニ於テ攝政ヲシテ統治權ノ或ルモノヲ行フコトヲ得サラシメ眞ノ統治者モ亦之ヲ行フコト能ハサルカ故ニ一時此等ノ權利ヲ止息セシムルニ至ルモノハ民事上後見人ノ想念ノ混入スルニ因ル」ト。

○「攝政ヲ置クノ間」憲法ヲ改正セサルノ理由ハ既ニ第十七條ニ於テ述ヘタリ。

攝政ヲシテ皇室典範ヲ變更セシメサル云々ハ實ニ皇室典範ニ屬スルヿナレトモ之ヲ此ニ載スル所以ノモノハ、要スルニ攝政ハ元首ノ國法上ノ代理者ナリ、從テ

國家ノ公權上ヨリ設クル所ニシテ天皇ニ代テ其ノ國ノ元首トシテノ權力ヲ使行スルニ止マリ、其ノ皇族ノ家長權ニ至リテハ之ヲ代表スルモノニ非サレハナリ、皇室典範ハ特ニ皇族ノ爲ニ布ク所ニシテ、皇族部内ヨリ觀レハ私權上ノ規程ニ屬スルモノ多ケレハ公權上ノ代理者ノ處理スヘキ限ニ在ラサルナリ、此ノ次第ハ亦第十七條ニ「攝政ハ天皇ノ名ニ於テ大權ヲ行フ」トアルニテ明白ナリ。

第七十六條　法律規則命令又ハ何等ノ名稱ヲ用ヒタルニ拘ラス此ノ憲法ニ矛盾セサル現行ノ法令ハ総テ遵由ノ効力ヲ有ス

歳出上政府ノ義務ニ係ル現在ノ契約又ハ命令ハ總テ第六十七條ノ例ニ依ル

○法律規則命令云々ハ幕府ノ禁令ヲ除キ維新以來憲法有效ノ時ニ至ルマテノ間ニ於テ正當ノ公權ヨリ發シタル一切ノ制令ヲ云フ、即チ其ノ之ヲ發シタル所ノ官司ノ如何ヲ問ハス、又其ノ關スル所ノ事件ノ如何ヲ問ハス、唯タ正當ノ職權ヨリ出テ、憲法實施ノ時ニ至ルマテ有效ナリシヲ以テ標準トスヘキナリ。

法律勅令ノ名稱ハ十九年二月二十六日ノ公文式ニ始マルト雖、是レ唯立憲制ノ豫修ヲ爲シタルニ止マリ、義解ニモ謂ヘル如ク、何ヲカ法律トシ何ヲカ勅令トス

ルニ至テハ未タ一定ノ限界アルニ非ス、且國法上ノ理由ヨリスルモ法律勅令ノ限界ハ立法議會ノ開設以後ニ非サレハ生スルコト能ハサルモノナリ。其ノ故ハ凡ソ事件ノ性質ニ依リ法律タルヘキモノト命令タルヘキモノトヲ區別セントスルノ企ハ各邦ノ實驗ニ於テ奏功セス、唯タ議會ノ協贊同意ヲ經テ制定セラレタリト云フ形式上ノ標識ヲ以テ法律ノ法律タルコトヲ知ルノ外ナケレハナリ。

セリグマン法律篇ノ開卷第一ニ曰「憲法ヲ以テ新ニ國家生活ノ官能ヲ編成シタルノ前ニ於テ君主國家ノ無制限立法者タリ並ニ行政者タリシ時ニ在テハ法律トハ一般ニ權義規程ヲ設定スルモノ是レナリキ、即チ一定ノ事變、行爲及不行爲ヲシテ法律上ノ事實タラシムル所以ノモノタル、國家抽象ノ意志ノ拘束的宣告ヲ指シタリ、而シテ憲法一タヒ出テ、立法ノ經路ヲ轉更シ、新機關トシテ議會ヲ設ケテヨリ以來、獨リ權義規程ヲ設定スルモノノミナラス、總ヘテ適當ノ機關ヨリ出テ、憲法ニ定メラレタル体式ヲ以テ爲サレタル國家ノ宣告ヲ包含スルニ至リ、又其ノ含蓄スル所ノ條項ノ如何ニ關係セサルナリ」ト。

○「此ノ憲法ニ矛盾セサル」ト云フニ就キテハ精確ナル意義ヲ定ムルコト必要ナリ。矛盾ニ事件ノ矛盾ト法制ノ矛盾トアリ。例ヘハ憲法ハ法律ノ範圍内ニ於テ居住移轉ノ自由ヲ認メタル保安條例ニ於テ人ニ退居ヲ命スルノ權ヲ行政官ニ屬セシメタルハ是レ事實ノ矛盾ナリ、然レ𪜈法制ノ矛盾ニ非ス、今若シ正面ニ「行政官ハ命令ヲ以テ居住移轉ノ自由ヲ制限スルコトヲ得」ト云フカ如キ一條ヲ制定シタリトセンカ、是レ法制トシテ憲法ニ矛盾セルモノナリ。又例ヘハ國家毎年ノ歳出歳入ノ豫算ヲ以テ帝國議會ノ協贊ヲ經ルヲ要セス」ト一般ニ規定セハ是レ法制ノ矛盾ナリ、之ニ反シテ或ル特別ノ歳出又ハ歳入ノ款項ヲ擧ケテ之ヲ豫算ニ載スルモ年々協贊ヲ經ルヲ要セサルモノトスルハ唯事實ノ違反ナルノミ、法制ノ違反ニ非ス。サテ本條ニ於テ矛盾ト云フニ當リテハ此ノ二種ノ矛盾ノ孰レヲ指スヤト云フコト一ノ問題ナリ、而シテ廿四年一月ニ於ケル保安條例ノ執行ハ事實ニ於テ此ノ問題ヲ釋定シタリ、則チ其ノ第四條ハ事實トシテ憲法第二十二條ニ矛盾スルニモ拘ラス衆議院ノ故サラ其ノ廢止ヲ議決シ、此ノ議決ノ實効ヲ見サル前ニ政府同條例ヲ執行シテ議會モ敢テ其ノ違憲ヲ咎メサリ

シハ、是レ事實ニ於テ同條例ヲ以テ仍ホ有効ナリト認メタルモノナリ。且眞ニ法理ヨリスルモ此ノ釋定ヲ以テ正當ナリトスル所以ノ者ハ他ナシ、帝國憲法ハ革命ノ憲法ニ非ス、舊來續繼セル天皇ノ大權ヨリ出テタルモノナリ、而メ其ノ條規ハ唯タ將來ニ向テ統治權ノ施行ヲ制限セントスルノミ、敢テ既往ニ於ケル正當公權施行ノ結果タル現行ノ法令ニマテモ打消ノ効力ヲ及ホスノ意ニ非サルニ因ル。既往ニ於テハ立法ノ全權天皇及天皇ノ政府ニ在リタリ、而シテ現行ノ法令ハ此ノ全權ノ結果ナリ、憲法ハ此ノ大權ヲ撲滅シテ新ニ立法權ヲ設ケタルニ非ス、唯將來ニ於テ一定ノ場合ニハ帝國議會ノ協贊ヲ經ルヲ必要トシタルノミナリ、是ヲ以テ既往法令ノ全部ハ依然効力ヲ有シ、唯其ノ中ニ就テ憲法七十六个條ノ或ル一條又ハ一項ニ違反スル正面ノ條項ノミ無効ニ歸スルナリ。

今事實ニ涉リテ之ヲ稽査スルニ、實際本條ニ依リ始メテ効力ヲ失フニ至レル法令ハ殆ト一モ無シ、是レ本邦立憲ノ制ノ漸ヲ以テ進ミ今日アルニ至レルニ因ル。

○「遵由ノ効力ヲ有ス」ト云フニ就キテハ法律トシテ効力ヲ有スルヤ將タ命令トシテ効力ヲ有スルヤノ問題ヲ究定セサル可カラス。既往ノ法令ハ帝國議會ノ

協贊ヲ經タルニ非サレハ假令法律ノ名ヲ以テ發布セラレタルモノアリトモ是レ憲法ニ謂フ所ノ法律ニ非ス、憲法上ノ法律ニ對シテ謂ヘハ皆是レ命令ナリ。彼ノ刑法ノ如キモ名ハ法律ナレト其ノ實ハ命令ナリ、何トナレハ議會ハ之ヲ協贊シタルニ非サレハナリ。然ルニ憲法ニ依レハ命令ヲ以テ法律ヲ變更スルコトヲ得サルモ命令ハ命令ヲ以テ變更スルヿヲ得ヘキ所ナリ。是ニ於テ既往ノ法令ハ何ニ依ラス命令ヲ以テ之ヲ變更スルヿヲ得ヘキヤ否ヤト云コト一ノ問題ト爲レリ。此ノ問題ノ解釋ニ曰「其實ハ皆命令ナルモ憲法ニ於テ法律タルコトヲ要スル事件ニ關スルモノハ將來法律ヲ以テスルニアラサレハ變更シ難シ之ニ反シテ憲法ニ於テ法律タランヿヲ要スル事件ニ關係ナキモノハ假令憲法有効ノ前ニ於テ一旦法律トシテ制定シタル所ノモノモ法理上命令ヲ以テ之ヲ變更スルコトヲ得ヘシ、唯政略上ヨリ然セサルヲ宜シトスト云フノミ」ト。

此ノ點ニ就キテハ憲法以前ノ法律ト憲法以後ノ法律トノ間ニ大差アルコトヲ知ラサルヘカラス。憲法以後ニ於テ議會ノ協贊ヲ經テ裁可公布セラレタル法律ハ其ノ各條皆法律ニシテ敢テ其ノ事件ノ性質ニ關係スルコトナシ何トナレ

ハ各條皆議會ノ協贊ヲ經タルモノナレハナリ。是ヲ以テ此等ノ法律ニ在リテハ何レノ一條タリトモ命令ヲ以テ變更シ難シ。之ニ反シ議會以前ノモノニ在リテハ唯タ憲法カ法律ヲ以テ規定センコトヲ要スル事件ニ關スル條項ノミ憲法實施ノ時ヨリ法律タルノ性質ヲ備フルニ至リ、其ノ他ノ條項ハ假令同一章程ノ内ニ在リトモ命令ニシテ法律ニ非ス、隨テ命令ヲ以テ之ヲ變更ヌルコトヲ妨ケサルナリ。例ヘハ郵便條例ハ憲法以前ノモノナリ、而シテ憲法以後ニ至リテモ郵便事務ハ法律ノ規程ニ依ラサル可カラサルノ必要絶ヘテナシ、然レモ其ノ内ニ揭ケタル罰則ハ今日ニ於テ法律ニ依ルニ非サレハ適用シ難キモノアリ、故ニ此ノ罰則ノ適用ニ關スル一部分ノミ憲法第廿三條ノ有效ナルト同時ニ法律タルノ効力ヲ得テ將來ハ法律ヲ以テスルニ非サレハ變更スルコトヲ得サルナリ。

帝國憲法講義　畢

明治三十年六月廿九日印刷
明治三十年七月　二　日發行

東京市芝區下高輪町五十三番地
編輯者兼發行者　平松福三郎

東京市神田區美土代町二丁目一番地
印刷者　島連太郎

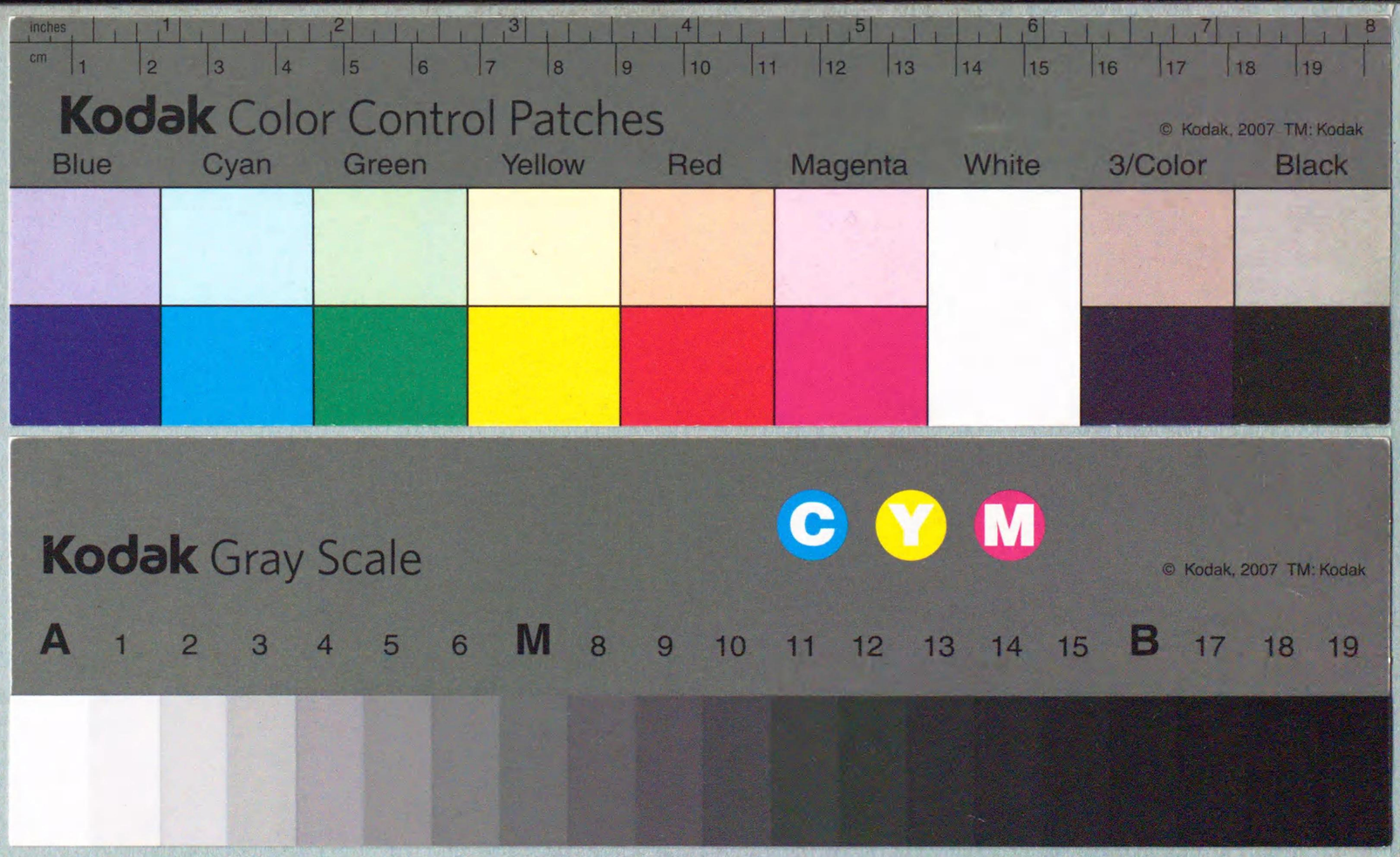
司法省指定私立明治法律學校出版部
發行所　講法會

東京神田駿河臺
印刷所　東京市神田區美土代町二丁目一番地　三光社活版所

東京帝國大學圖書

W323.2
A71

最高裁判所図書館
000126503


inches
cm
Kodak Color Control Patches
© Kodak, 2007 TM: Kodak
Blue
Cyan
Green
Yellow
Red
Magenta
White
3/Color
Black
Kodak Gray Scale
C
Y
M
© Kodak, 2007 TM: Kodak
A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19